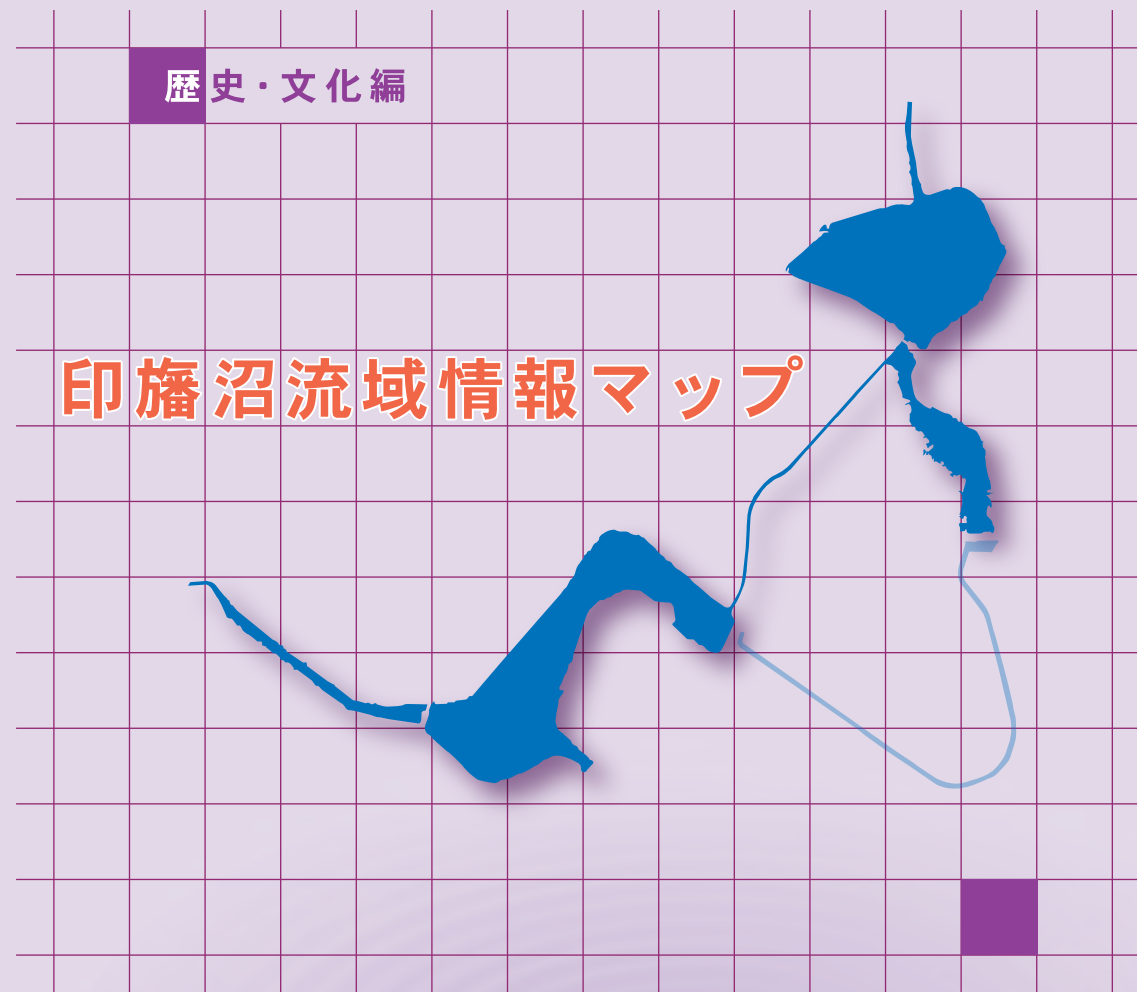


印旛沼流域情報マップ



歴史・文化編

印旛沼流域情報マップ

印旛沼流域情報マップの"-歴史・文化編-"は、"治水・利水編"につづき、印旛沼とその流域の歴史や文化について情報を地図上で示したものである。

これらの情報を通して、印旛沼とその流域の歴史や文化の移り変わりについて理解が深まれば幸いである。

裏表紙・表紙の印旛沼

(メッシュの間隔は縦横1km)

(現在の印旛沼の水域は、北端は酒直水門、西端は阿宗橋、南端は鹿島川河口。)



目次

印旛沼とその流域の概要	1
1 印旛沼の成り立ち	1
2 印旛沼の概要	3
3 印旛沼流域の概要	7
印旛沼流域の変化	11
1 印旛沼流域での暮らしのはじまり	11
2 生活圏の変化	12
3 印旛沼周辺の交通の移り変わり	17
かつての暮らし	21
1 農業	21
2 漁業	27
流域に育まれた文化	29
1 文化を培ってきた神社群	29
2 文化財	31
3 伝説	32
印旛沼流域歴史年表	33

付図 印旛沼流域情報マップ-歴史・文化編-
印旛沼流域の明治初期における村落分布

印旛沼とその流域の概要

1 印旛沼の成り立ち

かつては海だった

印旛沼は、かつて"古鬼怒湾(後の香取海)"と呼ばれ、現在の霞ヶ浦や、千葉県佐原付近の水郷地帯を一つの海域とする大きな内湾の中にある入江の一つにすぎなかった。古鬼怒湾は、今から1万ないし数千年前の温暖な縄文時代に海水が進入してでき、銚子(千葉県)の辺りで太平洋とつながっていた。その後、温暖な時代が終わり、弥生時代に入ると、海退し、古鬼怒湾は鬼怒川などの河川から運ばれてきた土砂の堆積によって狭められ、水の性状も徐々に淡水化していった。

「堰止湖」浅くなる湖

さらに時がたつと、多くの入江は鬼怒川本流から流出する土砂によってふさがれ、それぞれ独立した水域として残った。印旛沼や、隣接の手賀沼なども、このようにしてでき上がった湖沼であり、その成因から堰止湖と呼ばれている。

江戸時代になると、当時、東京湾に注いでいた利根川の河道を鬼怒川の支流にあたる常陸川と結び(赤堀開削工事と称されている)、銚子の方向に向かわせる、世にいう「利根川東遷事業」が行われた。しかし印旛沼は、この事業後、昭和中期に行われた「印旛沼開発事業」の完成まで、利根川の洪水の影響を頻繁に受ける洪水被害の歴史を歩むことになった。

印旛沼の逆三角洲

湖沼の流出口が河川に向かって開き、さほど水位差がない場合には、河川の増水によって河川水が逆流し、湖沼の流出口付近に土砂が堆積し、陸化を辿る。こうしてでき上がった陸地を逆三角洲と呼ぶ。利根川と印旛沼を結ぶ長門川では、印旛沼に向かって逆三角洲が形成され、印旛沼として古鬼怒湾から独立した湖沼になった。



(この図は、財団法人 日本地図センター発行の「手書き彩色関東実測図」を使用したものである。)

■5千年～1万年前の関東地方



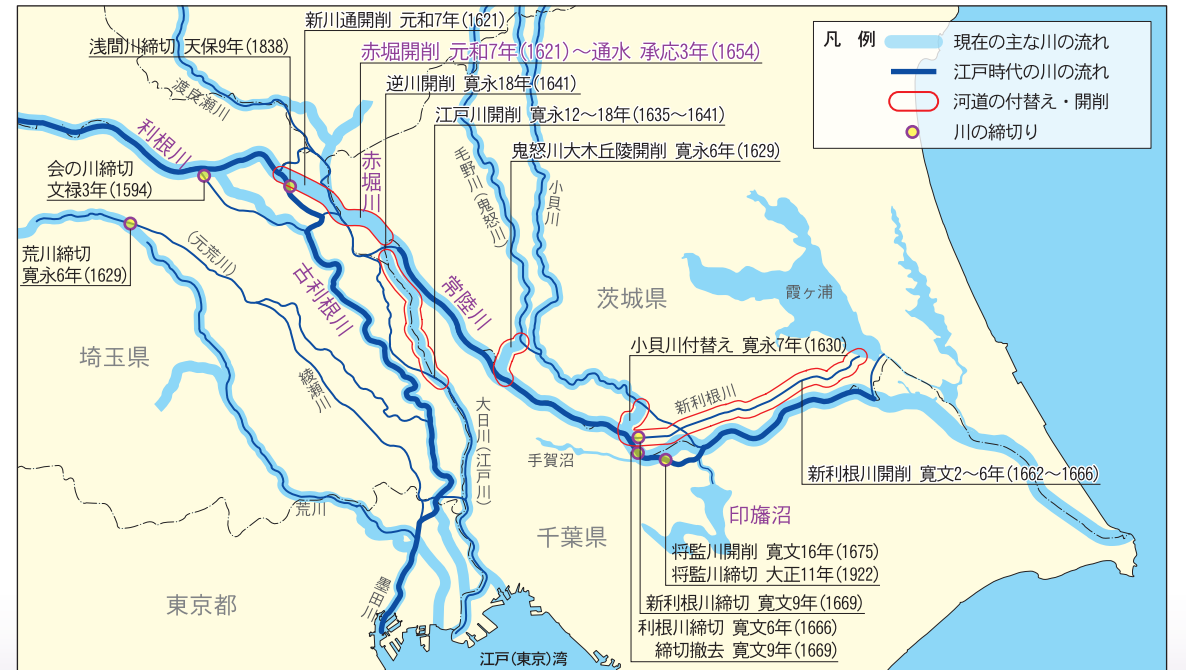
(資料：「千葉県の自然誌 本編1 千葉県の自然」千葉県 平成8年)

■古鬼怒湾(香取海)と印旛沼になる入江



(資料：「千葉県の自然誌 本編1 千葉県の自然」千葉県 平成8年)
(この図は、当資料中の水脈想定図を基に現在の地形図で想定して作成。)

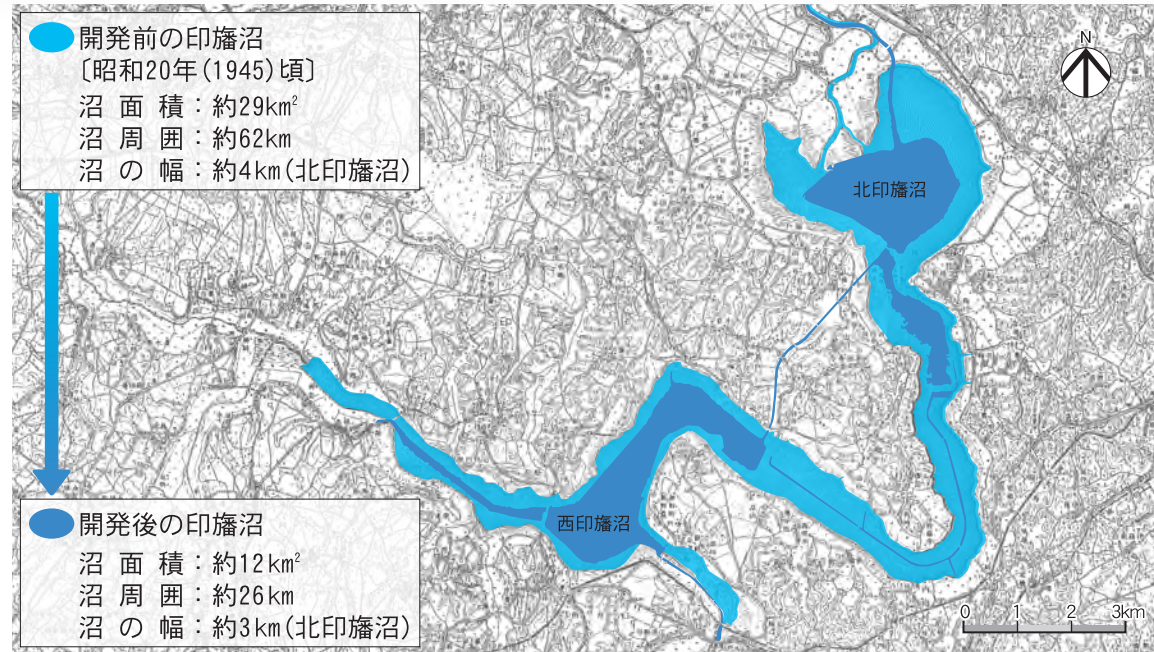
■利根川の流れの変化



(資料：「東葛地域の田園づくり」千葉県柏土地改良事務所 平成12年)

2 印旛沼の概要

■ 印旛沼開発事業前・後の印旛沼の姿

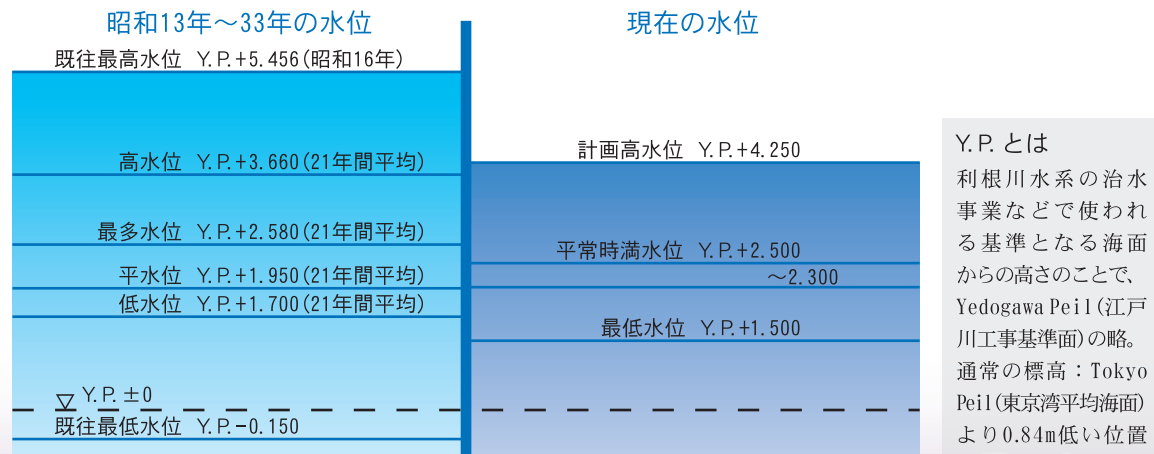


■ 現在の印旛沼

区分	天然湖	貯水量	1,970万m ³
湖面積	11.55km ² (北沼6.26km ² 西沼5.29km ²)	管理水位	かんがい期：Y.P.+2.5m 非かんがい期：Y.P.+2.3m
周囲長	26.4km	流入水量	約4.28億t/年 (S44～H23年平均)
最大水深	2.5m	滞留時間	約22日
平均水深	1.7m		

(資料：「印旛沼流域水循環健全化計画 概要版」印旛沼流域水循環健全化会議 平成23年、
流入水量は「水を活かす印旛沼」独立行政法人水資源機構 千葉用水総合管理所 平成23年)

■ 印旛沼開発事業前・後の水位の変化



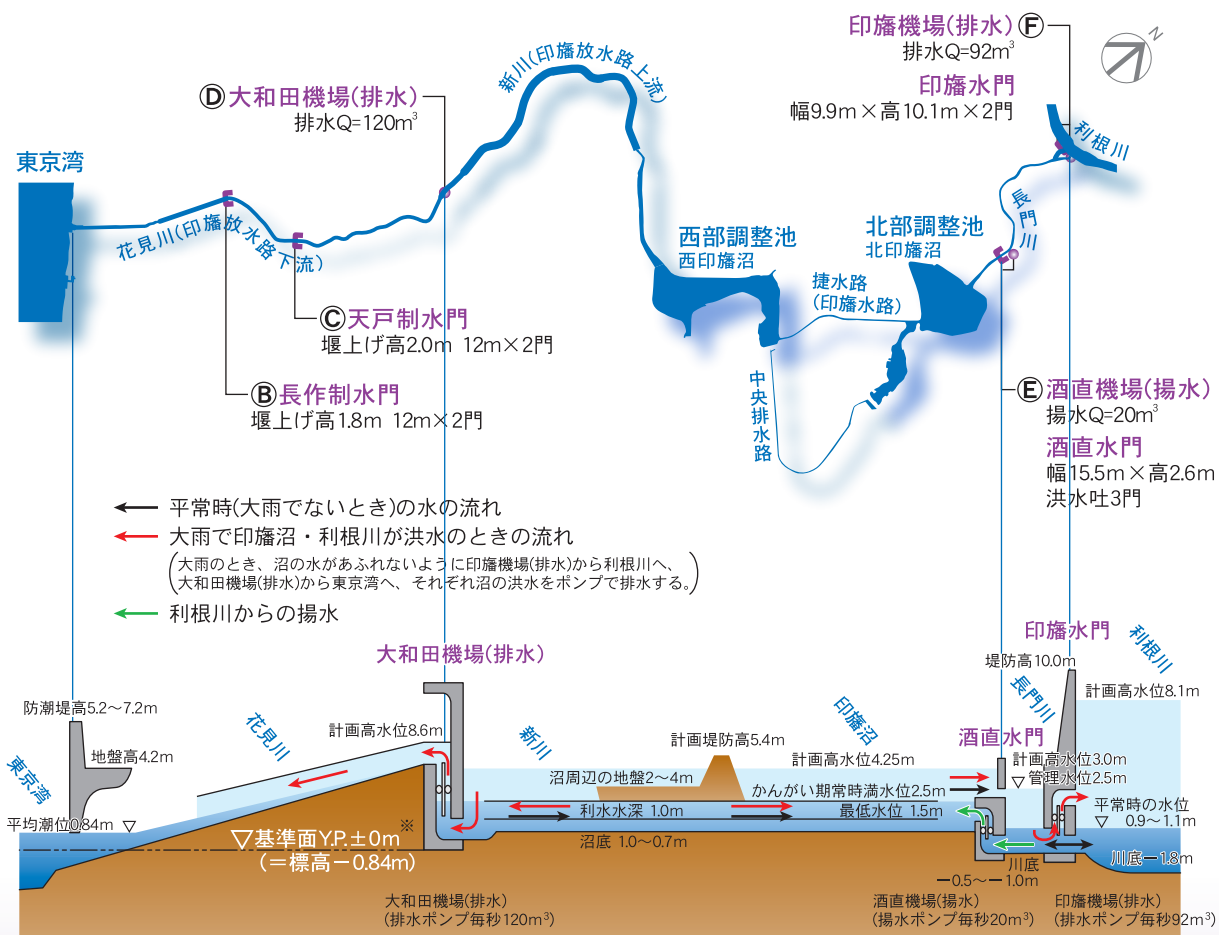
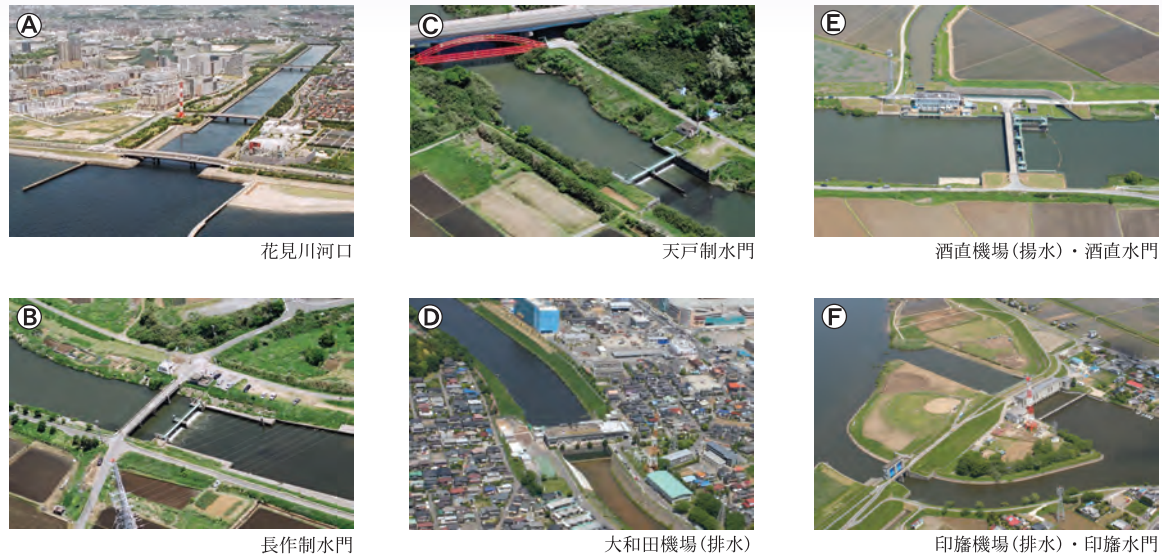
(資料：「印旛沼開発工事誌」水資源開発公団(現：独立行政法人水資源機構) 昭和44年)

■ 印旛沼の姿を正確に伝える印旛沼開発事業前の最も古い実測図〔明治15年(1882)頃〕



(この図は、財団法人日本地図センター発行の「手書彩色関東実測図」を使用したものである。)

■ 印旛沼の水位と水の流れ



※Y.P.は、3頁参照

(資料:「千葉用水総合事業所の概要」独立行政法人水資源機構 平成16年)

印旛沼開発事業

利根川東遷事業後、利根川の洪水のたびに、頻繁に起こる印旛沼の甚大な水害を打開するため、江戸時代に印旛沼の水を東京湾に流し落とす疎水路の開削工事(印旛沼堀割工事または、落堀工事と称された)が数回行われた。

しかし、いずれの工事も資金繰りや、人的な問題でことごとく失敗に終わった。この悲願が達成されたのは、昭和44年(1969)3月に竣工した印旛沼開発事業後である。この事業は、印旛放水路(疎水路)の開削と広大な干拓地の造成に加え、沼それ自身が農業、生活および工業の用水源などの多機能を持つ沼に開発された(印旛沼の開発の経緯の詳細については、「印旛沼流域情報マップー治水・利水編一」を参照)。

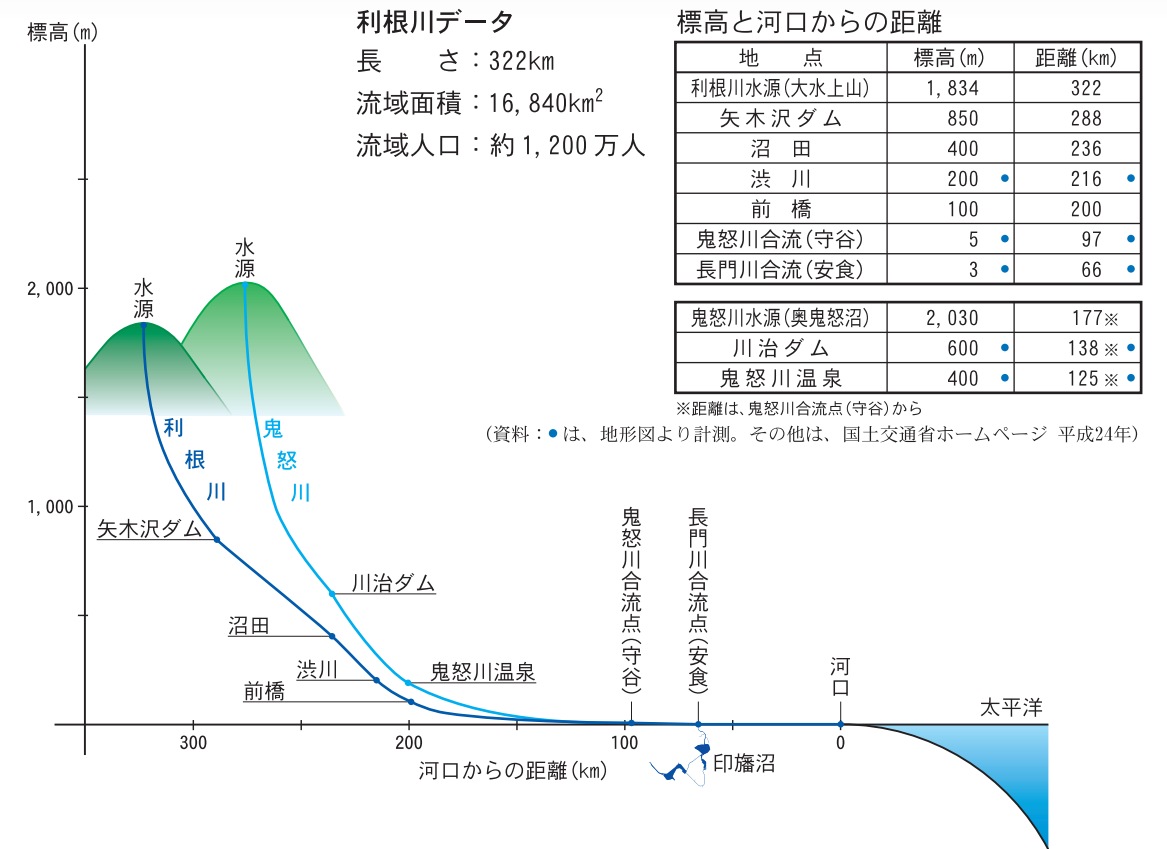


3 印旛沼流域の概要

■ 利根川流域の中における印旛沼流域の位置



■ 利根川・鬼怒川の縦断図



■ 長門川の河口



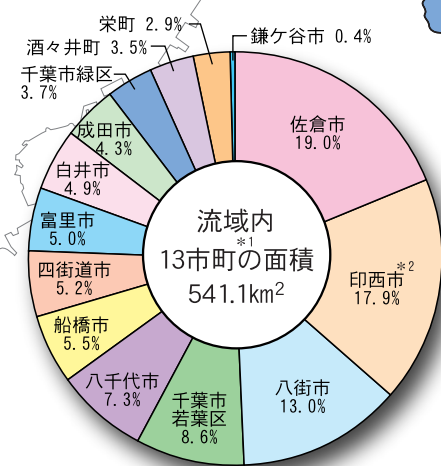
■ 印旛沼流域の概要



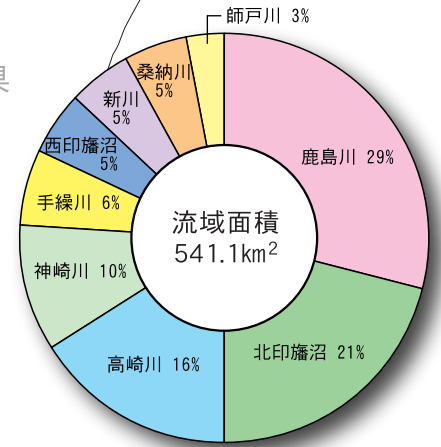
541.1km² (流域面積)
 千葉県面積 (5156.4km²) の10.5%
 利根川流域面積 (約16840km²) の3.2%

13市町 ^{*1} (流域市町数)
 千葉市・船橋市・八千代市
 鎌ヶ谷市・成田市・佐倉市
 四街道市・八街市・印西市
 白井市・富里市・酒々井町
 栄町

76.7万人 (流域人口) (平成23年4月1日現在)
 千葉県人口 (621.4万人) の12.3%
 利根川流域人口 (約1,200万人) の6.3%

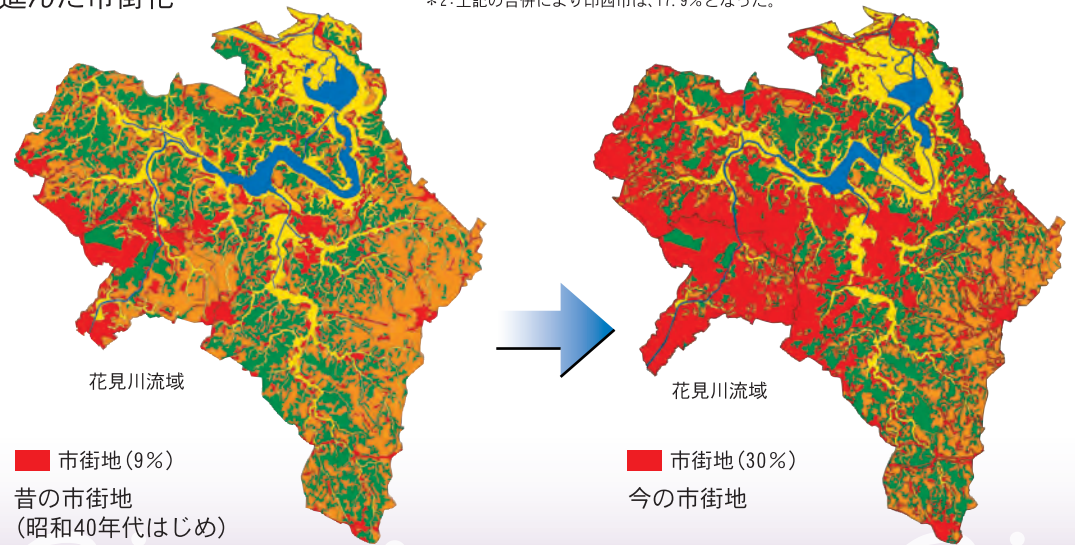


千葉県



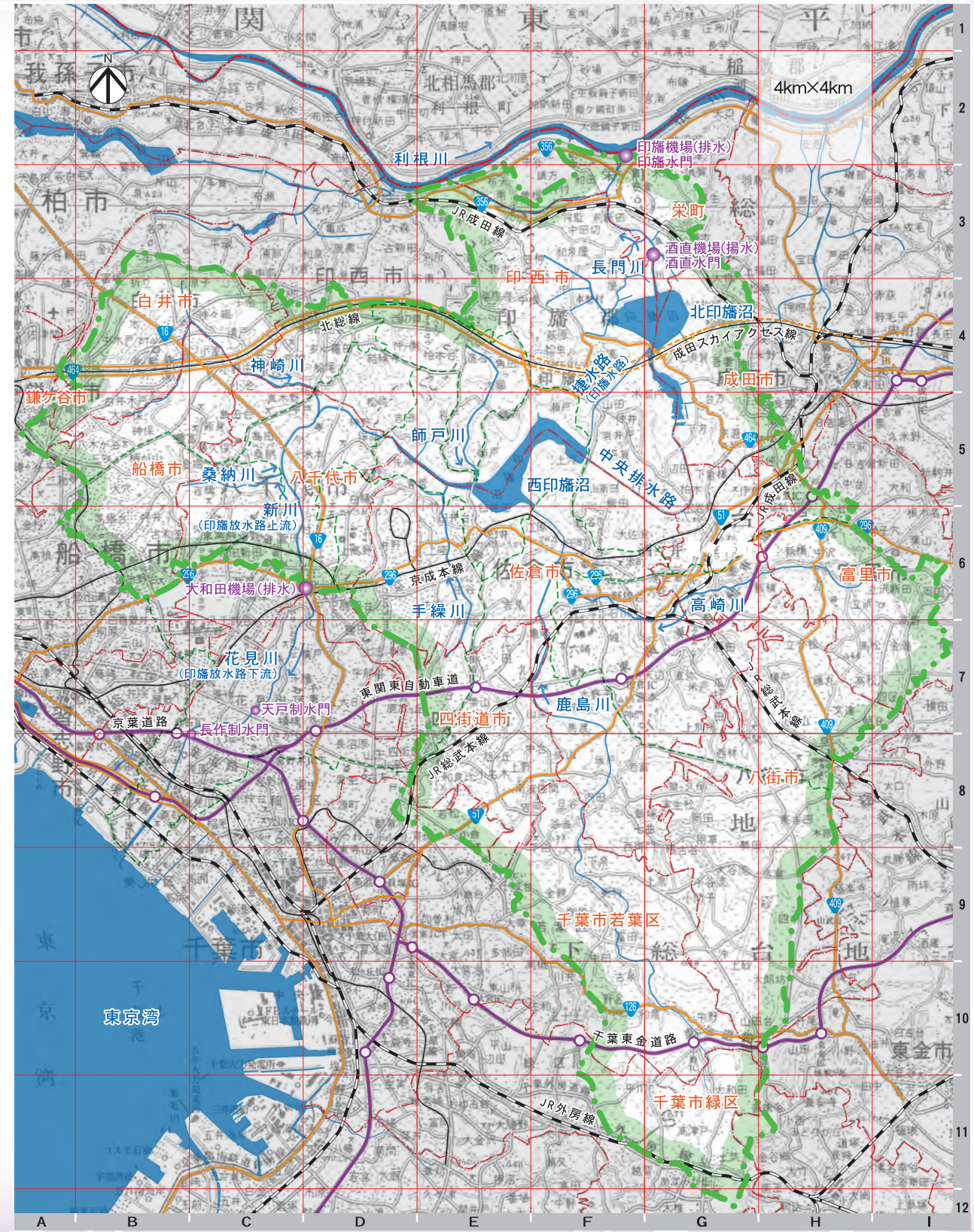
(資料：千葉県県土整備部、利根川流域は国土交通省ホームページ 平成24年)
 *1:平成22年3月に印旛村・本埜村が印西市と合併したことにより、15市町村から13市町となった。
 *2:上記の合併により印西市は、17.9%となった。

■ 進んだ市街化



(出典：「みんなの手でいきいき印旛沼！」千葉県 印旛沼流域水循環健全化会議)

■ 印旛沼流域の範囲と大きさ



印旛沼流域の変化

1 印旛沼流域での暮らしのはじまり

太古の下総台地

印旛沼が位置する下総台地は、約8万年前頃までにあった古東京湾と呼ばれる内湾に堆積した上部下総層群の上に、赤土と黒土の火山灰層が覆っている。上部下総層群からは、ナウマン象の化石、印西市木下の"木下貝層(国指定天然記念物)"や酒々井町酒々井の"上岩橋貝層(県指定天然記念物)"にみるように大量の貝化石が出土している。

数万年前に堆積した赤土層からは、旧石器時代の遺物が出土していることから、印旛沼流域には、相当古くから人々が住んでいたことが示唆される。旧石器時代の人々は、移動しながら、動物の狩猟や食料になる植物を採取し、生活していた模様である。

■貝塚・古墳・遺跡の分布とナウマン象の化石が発掘された場所



定住のはじまり

約6,000~5,000年前の縄文時代早期の頃、気候の温暖化で海面が上昇し、海水が氷河期に刻まれた谷の奥地まで進入し、内湾を形取った。この"古鬼怒湾(後の香取海)"と呼ばれる内湾に多くの貝類が生息していたことは、縄文時代の人々の生活の場の証である貝塚が台地上のあちこちに広く分布していることからわかる。例えば、佐倉市上座の"上座貝塚"では、マガキ、ハイガイ、ハマグリ、アカニシ、オキシジミなどの内湾海産性の貝が混在して残っていると同時に、一方では、茅山式土器、竪穴住居、炉穴などが発掘されている。これらは、約6,000年前の縄文時代早期末の代表的な遺跡であるとされていることから、印旛沼周辺での暮らしは、この頃から定着し始めたといわれる。また、佐倉市井野の"井野長割遺跡(国指定史跡)"では、約4,000~3,000年前の縄文時代後・晩期の遺跡である土器・石器のほかに、土偶・土版・石棒などの祭祀に関係した遺物が出土し、文化的な営みの始まりを示している。

■井野長割遺跡

[付図 D-6]



(地図: 佐倉市都市基本図 S=1:2,500を複製)

(所在地: 佐倉市)

2 生活圏の変化

印旛沼周辺の古代の生活圏

古墳時代になると、谷津を利用した稲作や台地での牧場や畑作が定着し、人々の定住がさらに進み、生活様式の高度化と地域勢力の強まりが顕著になってきたと推察される。約1,700年前の弥生時代後期から1,200年前の平安時代まで集落が形成されていたと思われる佐倉市下志津の"飯郷作遺跡(県指定史跡)"では、弥生時代の墓様式の流れを汲む方形周溝墓や古墳時代の前方後円墳、方墳が発掘された。また、栄町竜角寺の"岩屋古墳(国指定史跡)"は、印旛沼の北岸台地に広がる竜角寺古墳群中の最大の方墳であり、規模は、全国第2位(古墳時代末期の方墳としては全国第1位)、また東関東では第1位を誇る。当時、この地域がいかに高度な文化と強い勢力を有していたかは、容易に想像できる。

■飯郷作遺跡

[付図 E-6]



(地図: 佐倉市都市基本図 S=1:2,500を複製)

[付図 G-3]

■岩屋古墳



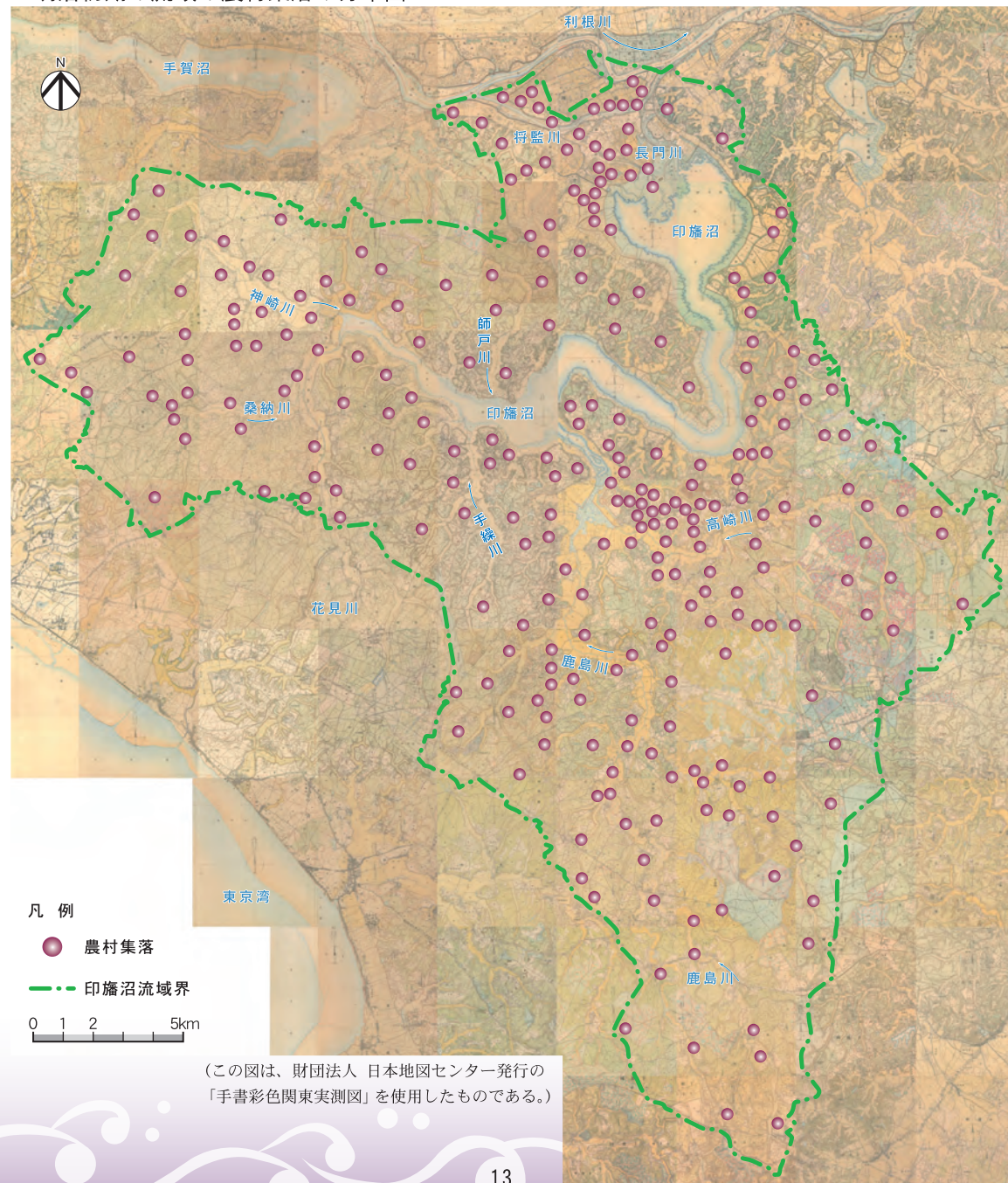
(地図: 栄町都市計画図 S=1:2,500を複製)

農村集落を中心とした近代の生活圈

印旛沼流域の農業は、台地に複雑に切れ込む谷津を利用した稲作と、台地で牧場や畑作が行われてきたと推察される。揚水技術が無かった時代には、印旛沼の水を灌漑に使うことは困難であり、谷津の湧水や天水が使われた。また、沼周辺の低地は洪水のたびに浸水するため、耕作には不向きであった。このようなことから、生活の場は、自ずと谷津沿いにあったことは、古くからある農村集落の分布から明らかである。

なお、明治初期の印旛沼流域における農村集落数は、約270を数えている。

■ 明治初期の流域の農村集落の分布図



合併を重ねて成立した現代の生活圈

明治初期に小規模な生活圈を形づくっていた農村集落は、財政的に自立した自治体になることが求められていた。明治22年(1899)に市町村制が実施されると、流域の集落は、昭和初期までに35の行政単位に統廃合された。さらに昭和中期になると、戦後の民主化にともなう地方自治の拡大によって市町村の合併がより促進され、流域内の市町村数は、15に統合された。そして現在、平成の大合併により13市町になり、印旛沼流域から村が消えた。(次頁:昭和期の市町村合併による行政区域の変化参照)

■ 明治中期の流域の大半を占める印旛郡行政区画図「千葉縣印旛郡全図」



■印旛河流域13市町村の移り変わり

明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降	明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降	明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降	明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降																																						
高田村 平川村	千葉郡 菅田村	千葉市 (S30)	萱田村 萱田町	千葉郡 大和田村	八千代市 (S29)	下曾根新田 下井新田 安食ト杭新田 行徳新田 中根新田 萩原新田 押付新田 小林新田 佐野屋新田 和泉屋新田 長門屋新田 中田切新田 松木新田 酒直ト杭新田 基兵衛新田 將監新田 松虫新田	岩富町 岩富村 七曲村 西御門村 宮内町 飯塚村 内田村 坂戸村 臼井村 臼井田町 臼井臺町 江原町 角來村	岩富町 岩富村 七曲村 西御門村 宮内町 飯塚村 内田村 坂戸村 臼井村 臼井田町 臼井臺町 江原町 角來村	船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 船穂村	印西町 (S29)	印西市 (H8)	H22に印旛村・本笠村と合併	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井村	白井町 (S39)	白井市 (H13)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)																												
野呂村 和泉村 中野村 高根村 北谷津村	千葉郡 白井村	千葉市 (S38)	桑納村 麦丸村 桑橋村 吉橋村 島田村 神久保村 小池村 眞木野村 佐山村 平戸村	千葉郡 睦村		印旛郡 本笠村 (T2)	龍服寺村 笠神村 中根村 瀧村 物木村 荒野村 角田村	岩名村 飯野村 土浮村 飯野町 山崎村 下根村 萩山新田 下根町 飯田村 大佐倉村 佐倉新町 佐倉宮小路町 佐倉並木町 佐倉裏新町 佐倉中尾余町 佐倉最上町 佐倉海隣寺町 佐倉田町 佐倉彌勒町 鐘木町 鍋山新田 佐倉野狐臺町 大蛇村 將門村 佐倉藤澤町 佐倉樹木町 佐倉本町	岩名村 飯野村 土浮村 飯野町 山崎村 下根村 萩山新田 下根町 飯田村 大佐倉村 佐倉新町 佐倉宮小路町 佐倉並木町 佐倉裏新町 佐倉中尾余町 佐倉最上町 佐倉海隣寺町 佐倉田町 佐倉彌勒町 鐘木町 鍋山新田 佐倉野狐臺町 大蛇村 將門村 佐倉藤澤町 佐倉樹木町 佐倉本町	船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村	印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)																														
上泉村 下泉村 谷當村 旦谷村 下田村 大井戸村 古泉村 富田村 中田村	千葉郡 更科村		千葉市 (S19)	米本村 下市場村 村上村 神野村 保品村 下高野村 上高野村			印旛郡 阿蘇村	印旛郡 本郷村	成山村 中臺村 中野村 山梨村 和田村 上野村 南波左間村 和良比村 小名木村 鹿渡村 吉岡村 馬渡村*	成山村 中臺村 中野村 山梨村 和田村 上野村 南波左間村 和良比村 小名木村 鹿渡村 吉岡村 馬渡村*	船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村		印旛郡 内郷村	佐倉市 (S12)		白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 佐倉町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)																											
小倉村 金親村	千葉郡 千城市			千葉市 (S14)			酒々井町 本佐倉村 本佐倉町 下臺村 馬橋村 墨村 飯積村 尾上村 中川村 上岩橋村 伊篠村 下岩橋村 柏木村		印旛郡 酒々井町	印旛郡 旭村	内黒田村 物井村 亀崎村 羽鳥村* 飯重村* 吉見村* 生ヶ谷村*		内黒田村 物井村 亀崎村 羽鳥村* 飯重村* 吉見村* 生ヶ谷村*			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 本郷村		佐倉市 (S12)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 佐倉町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)																							
土氣町 高津戸村 上大和田村 下大和田村	山邊郡 土氣本郷町						千葉市 (S14)		北布鎌村 布鎌酒直新田 布鎌下和田新田 布鎌臨川新田 布鎌大森新田 布鎌押付新田 布鎌三和村 布鎌太郎工門新田 布鎌上曾根新田 布鎌南新田 布鎌西新田 布鎌長門屋新田		印旛郡 布鎌村		四街道市 (S30)			大谷流村 吉倉村 東吉田村 上砂村 砂村 勢田村 用草村 根古谷村 小谷流村 岡田村	大谷流村 吉倉村 東吉田村 上砂村 砂村 勢田村 用草村 根古谷村 小谷流村 岡田村			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 本郷村		佐倉市 (S12)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 佐倉町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)																			
習志野原	千葉郡 二宮村								船橋市 (S29)		安食村 酒直村					印旛郡 下郷村	四街道市 (S30)			初富村	初富村			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村		印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)															
二和村 三咲村	東葛飾郡 八栄村										船橋市 (S12)					初富村				東葛飾郡 鎌ヶ谷村	鎌ヶ谷市 (S33)			下方村 臺方村 江辨須村 大袋村 飯田新田 北須賀村 船形村 八代村 飯仲村 成木新田	下方村 臺方村 江辨須村 大袋村 飯田新田 北須賀村 船形村 八代村 飯仲村 成木新田			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村		印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)											
楠ヶ山村 大穴村 坪井村 古和釜村 金堀村 神保新田 八木ヶ谷村 大神保村 小室村 小野田村 東方村 行々林村	千葉郡 豊富村															船橋市 (S29)				初富村				東葛飾郡 鎌ヶ谷村	鎌ヶ谷市 (S33)			初富村	初富村			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村		印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)							
瀬戸村 平賀村 山田村 吉岡村 松虫村 荻原村	印旛郡 六合村																			印旛郡 印旛村 (S30)				初富村				東葛飾郡 鎌ヶ谷村	鎌ヶ谷市 (S33)			初富村	初富村			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村		印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)			
岩戸村 鎌刈村 師戸村 大廻村 造谷村 吉田村	印旛郡 宗像村																							印旛郡 印旛村 (S30)				初富村				東葛飾郡 鎌ヶ谷村	鎌ヶ谷市 (S33)			初富村	初富村			船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 彌富村		印西市 (H22)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井町	千葉市 (S44)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)
明治初期	明治中期 (22年頃)				大正以降																							現在				村落 (新田含む)				町村	市町												

(*各市町村は、付図の村落分布に対応する。)

明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降	明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降	明治初期	明治中期 (22年頃)	大正以降		
船尾村 惣深新田 結縁寺村 多々羅田村 戸神村 武西村 松崎村	印旛郡 船穂村	印西町 (S29)	白井橋本村 神々廻村 復村 根村 木村 中村 折立村	印旛郡 白井村	白井町 (S39)	白井市 (H13)	七栄村 中澤村 新中澤村 新橋村 十倉村 高松村 立澤村 立澤新田 高野村	印旛郡 富里村	富里町 (S60)	富里市 (H14)

(資料:「千葉縣改正町村名便覽」明治22年、千葉県統計年鑑)

■昭和期の市町村合併による行政区域の変化



3 印旛沼周辺の交通の移り変り

水上交通と物流

「印旛沼開発事業」以前における印旛沼は、幅で約4kmから数百mと場所による違いはあったが、延長は20km以上にも及ぶ広大な水域であった。このため、対岸への行き交いには、渡船が唯一の手段であった。主な渡しには、甚兵衛渡し、中川渡し、臼井渡しなどの12箇所と、その他に個人が有する河岸なども多くあった。渡船には、牛や馬を乗せる馬船と、人や自転車を乗せるヨマブネがあった。営業時間は、夏は朝5時から夜8時まで、冬は朝5時半から夜8時までと定められ、これ以外の時間では割増料金が定められていた(料金表は下記参照)。

しかし、印旛沼開発事業によって干拓が進むにつれて、渡船は、橋に代わり、廃止を余儀なくされた。廃止に際しては、昭和43年(1968)3月に水資源開発公団(現水資源開発機構)と補償契約が結ばれ、ついに渡船組合は解散することとなった。

■ 渡船の料金表

(1円=100銭)

	大人	小人	馬牛	自転車	荷馬車	人力車
昭和初期(吉田渡し)	3 銭	2 銭	1 0 銭	2 銭	4 銭	3 銭
昭和20年頃(甚兵衛渡し)	1 円	6 0 銭	3 円	5 0 銭	1 円	8 0 銭

(資料:「印旛村史」平成2年)

一方、大量の物資を運搬する高瀬船は、江戸前期に行われた利根川東遷事業以来、利根川の水運を担い、この大河を通して印旛沼は、広く交流することになった。この船は、川舟の一つで、主に物資の運搬に用いられ、浅瀬を漕ぎ上げられるよう、底を平たく浅く造り、米250~500俵(1俵約60kg)が積める船長14~27mの木造船であった。水運は、銚子方面から「干し鰯・醤油・味噌・石材」など、東京方面からは「日用雑貨・衣類」などが長門川を通り印旛沼に入り、主に柏木河岸、瀬戸大川岸、岩戸河岸などで荷を下ろし、印旛沼の河岸からは「薪・竹材・米・木材・繭・炭」などが積み出された。

佐倉市臼井田にあった河岸の一つ"田町河岸"には、高瀬舟2艘が同時に接岸でき、銚子・潮来方面からは砂利、藁灰、藁、干鰯などが運搬され、帰りには、主に竹を積み込み出港した。積み出された竹は、銚子の大きな醤油工場で醤油樽のタガに使われたようである。

■ 高瀬舟模型



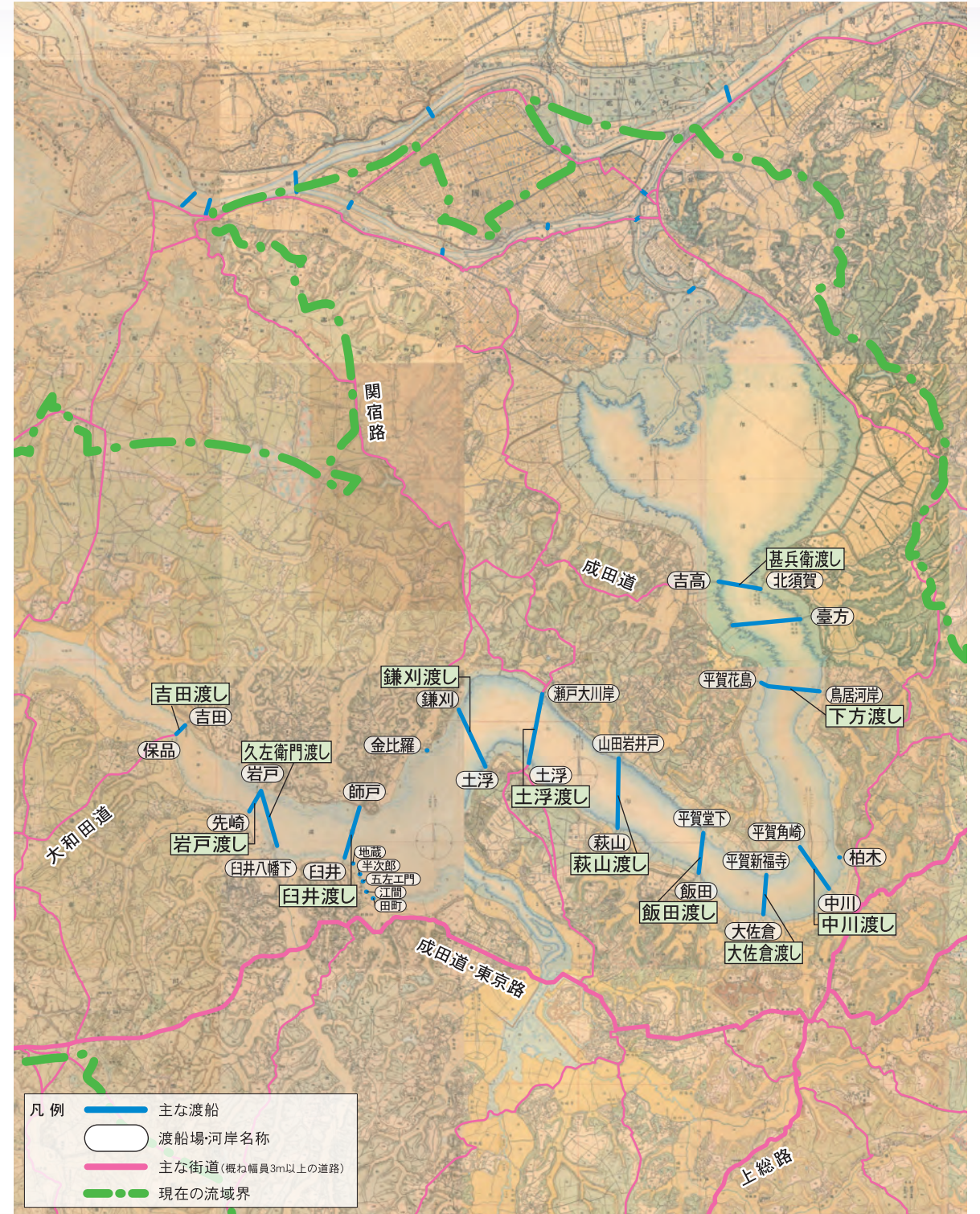
(出典:「千葉県立関宿博物館 常設展示図録」財団法人千葉県社会教育施設管理財団 平成8年)

■ 萩山川岸に着いた渡し舟



(出典:「印旛沼物語あの日あの日」水資源開発公団 千葉用水総合事業所(現:千葉用水総合管理所) 平成14年)

■ 明治後期の主な渡船と街道



(資料:「酒々井町史」昭和62年、「佐倉市史」昭和46年、「印旛村史」平成2年、「臼井田の今昔」臼井田自治会 平成16年)

(この図は、財団法人日本地図センター発行の「手書彩色関東実測図」を使用したものである。)

陸上交通

●街道と橋

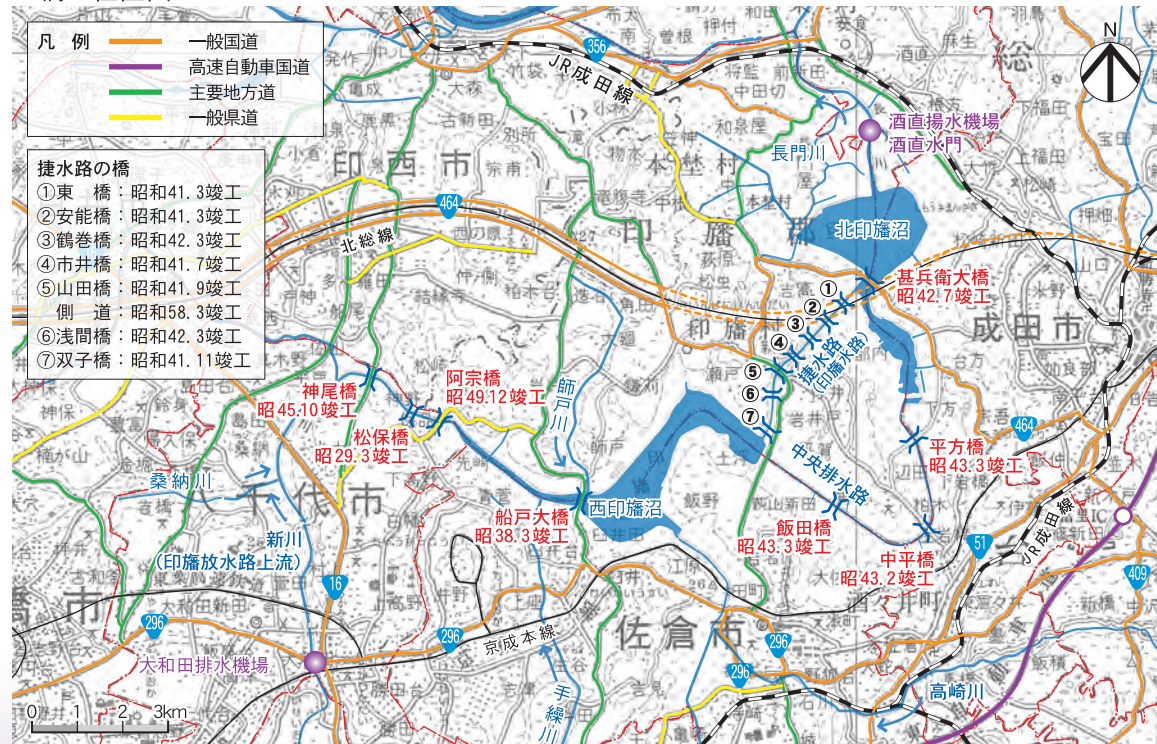
印旛村(現印西市)では、佐倉から木下(現印西市)・安食(現栄町)への道、白井(現佐倉市)から本郷(現印西市)を通過して木下への道が往還と呼ばれ、特に往来が多かった。また吉高から甚兵衛渡しを利用して成田へ向かった「成田道」、吉田から保品への渡しを利用して大和田(現八千代市)へ向かった「大和田道」なども大切な生活道であった。この他の道は「みち」と呼ばれ、畑の中の道を「作場道」、田の中の道を「畦道」、山の裾を縫って通る道を「辺田道」などとそれぞれ呼ばれていた。道の途中や、分岐点には、塔・観音・道標などの石造物が建てられ、通行人の安全と便利に考慮されていた。

酒々井町では、日本橋から成田へ向かった「成田道」、芝山から三里塚を通過して成田へ向かった「芝山道」が主な道であった。成田道は成田参詣に利用され、日本橋から成田までは片道1泊2日、往復3泊4日が普通であり、途中の千住・新宿・八幡・船橋・大和田・白井・酒々井・寺台などが宿場として栄えていた。

成田市では、佐倉から白井・大和田などを通過して東京へ向かった「東京路」、佐倉から千葉へ向かった「上総路」、佐倉から渡船をへて木下・関宿へ向かった「関宿路」、小見川・鹿島・銚子方面へ向かった「鹿島・香取路」が主な道であった。

印旛沼開発事業による干拓に伴って、渡船の代わりに架かった橋は、8橋である。甚兵衛大橋・船戸大橋・阿宗橋・神尾橋は県道に指定され、印西地区と東南部を結ぶ幹線となった。

■橋の位置図



●鉄道

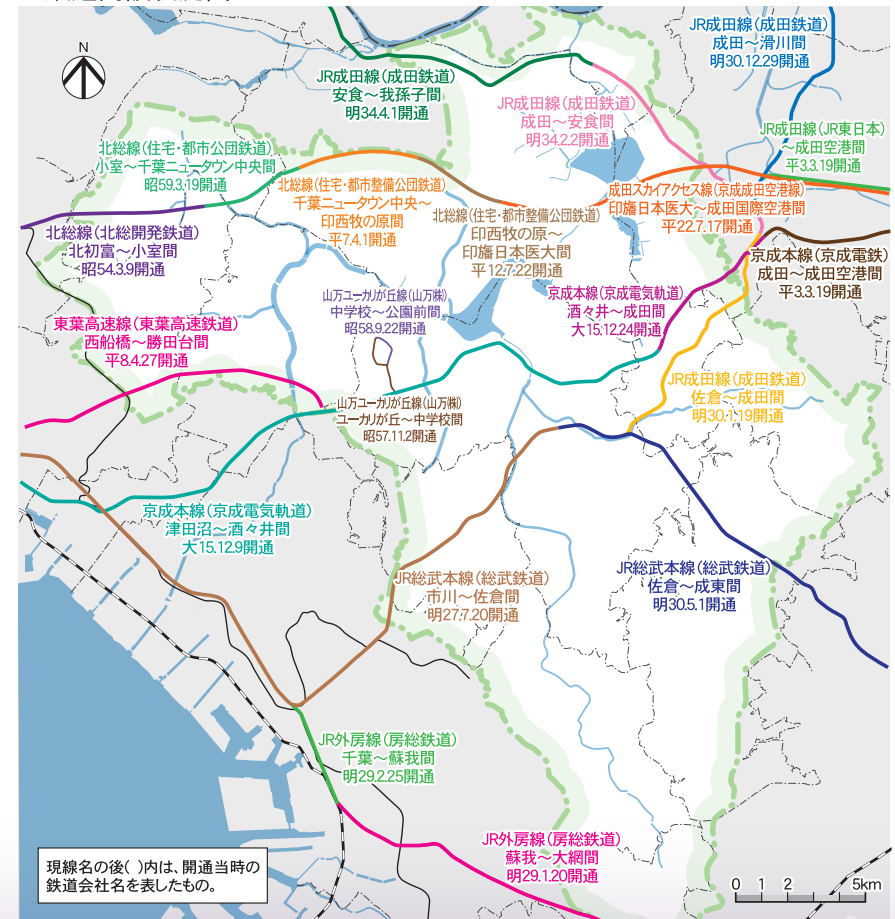
明治27年7月、千葉県で初めて総武鉄道(現 JR 総武本線)の市川ー佐倉間(駅は市川・船橋・千葉・佐倉)が開通した。

明治30年1月、成田鉄道(現 JR 成田線)が我孫子ー佐原間を本線、成田ー佐倉間を支線として開通した。成田参詣客は、開設された「酒々井駅」を利用するようになり、徒歩旅行者は減り、酒々井宿などの機能が失われたが、その反面では、物資の集・出荷が盛んとなった。当時の成田鉄道は、成田ー佐倉間を1日7・8往復、2時間間隔で運行されていた。また、明治35年3月には、成田ー上野間の直通運転が開始された。

大正3年9月、総武鉄道(現 JR 総武線)の「南酒々井駅」が開設され、和田村地区(現佐倉市)や八街村(現八街市)では、酒や醤油、木材の出荷が盛んになった。

大正15年12月9日、京成電気軌道(現京成本線)の津田沼ー酒々井間、同年12月24日、酒々井ー成田間が開通し、宗吾参道駅が開設されると、早くて便利な京成電気軌道に人の流れがうつることとなった。当時の京成電気軌道の運賃は、1区間6銭(1銭=0.01円)、5区間以上は5銭の割で計算されていた。

■鉄道開設状況図



かつての暮らし

1 農業

農地と作物

印旛沼流域の農業は、古くより台地に切れ込む谷津と沼周辺の低湿地での稲作、そして台地上での牧場や畑作が中心であった。農産物は、米を主とし、牧場の明治開墾によって台地上は広い畑地となり、麦、落花生(明治9年(1897):千葉県で栽培開始)、甘藷(享保年間(1716~1736)に青木昆陽が千葉県で試作に成功し、食糧難を救うものとして注目され各地で栽培が展開)、豆類、野菜類などのほか、養蚕による生糸が作られた。この中で、印旛沼周辺で直接沼の影響を受けた農業は、沼周辺低湿地の稲作である。大正11年(1922)に印旛水門(安食水門)が設けられるまで、利根川の洪水[外水、または"日光水"と称される]は印旛沼にまでおよび、水田に被害をもたらした。明治43年(1910)の大洪水では、沼周辺の4,000町歩(約4,000ha)が冠水したと伝えられている。

一方、印旛沼流域内の洪水(内水)による被害は、大正期の印旛水門(安食水門)[大正11年(1922)]の完成後も多発し、昭和13年(1938)および同16年(1941)の大雨では、収穫期の水田が冠水し、全滅したといわれる。しかし、昭和43年度(1968)に竣工した「印旛沼開発事業」は、外水および内水による洪水被害を防止し、印旛沼周辺に安定した稲作を与えた。

モク採り

印旛沼周辺では、沼に生育する水草をモクと呼び、これを採ることを"モク採り"と称していた。モクは、魚類などの産卵、ふ化、稚・仔魚の成長の重要な場である一方、農耕地の貴重な肥料源であった。沼周辺の農家は、春から秋期にそれを採り、農作物に施肥した。モク採りは、周辺集落のほとんどの農家で所有していた米10俵ほどを積める舟(サツパ舟と呼ばれていた)で行っていた。当時、沼には何十種類の水草が繁茂していたが、モク採りの対象は、主としてコウガイモ、ホザキノフサモ、マツモなどの沈水植物であった。モクの堆肥としての価値は、リンはやや不足するものの、窒素とカリについては、いまの標準施肥にほぼ匹敵し、沼からの大きな恵みの一つであった。

■藻刈舟



(出典:「利根川図志 巻1」赤松宗旦 齋書房 昭和53年)

■モク採り

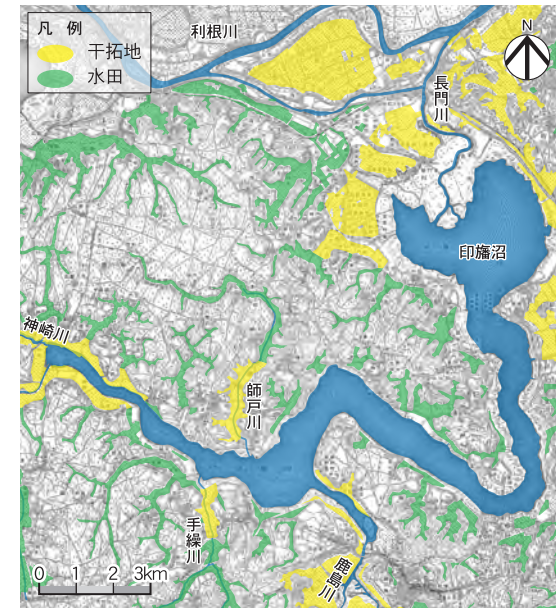


(提供:財団法人印旛沼環境基金)

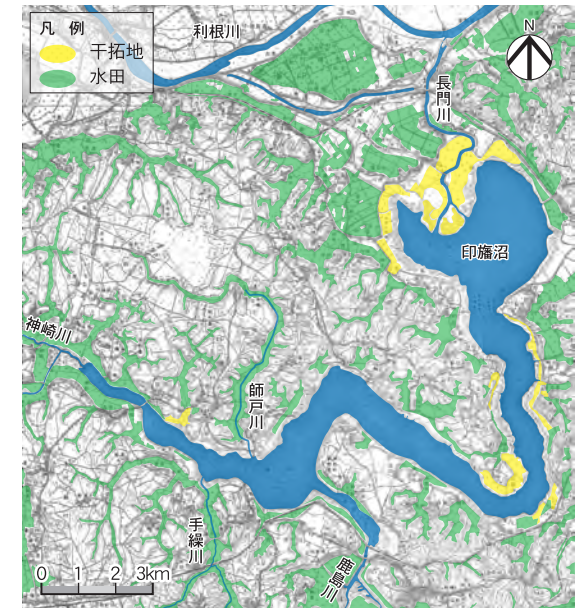
新田の開発

印旛沼周辺の農地を拡大するための干拓は、古くは江戸時代から行われている。主な干拓地としては、①印旛沼西部の神崎川と新川の合流デルタ地域、鹿島川河口部、手繰川および師戸川などの河口低地、②長門川西部の"逆三角州"のデルタ地域、③長門川東部のデルタ地域などである。近年では、昭和43年度(1968)に竣工した「印旛沼開発事業」の一つとして既干拓地の土地改良を含め、約900ha余の水田が造成された。

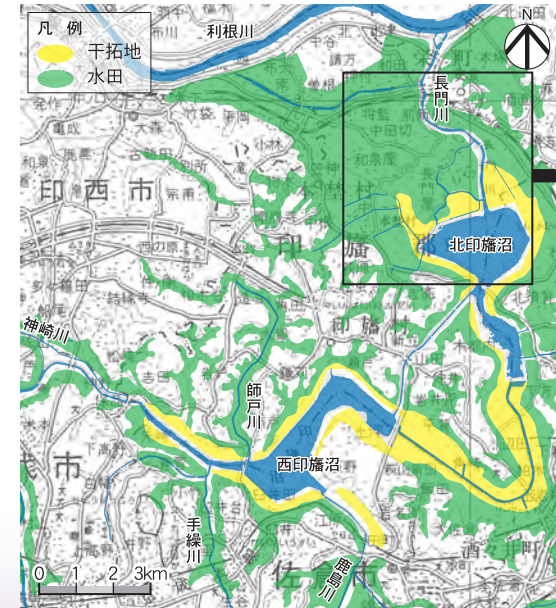
■明治中期頃までの干拓地



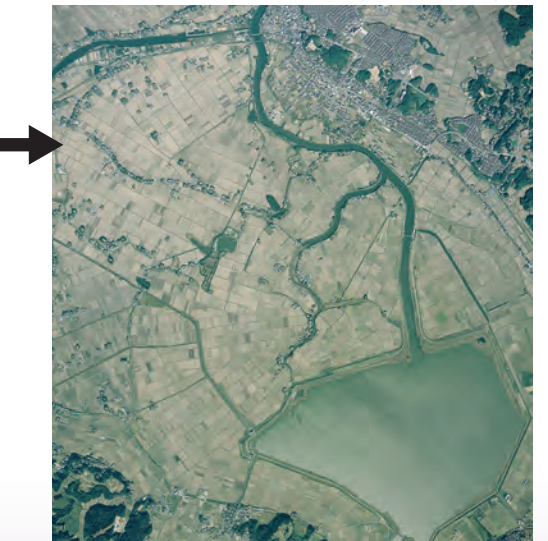
■明治中期以降昭和初期頃までの干拓地



■昭和43年度(1968)印旛沼開発事業の干拓地



■北印旛沼干拓地の空中写真[平成9年(1997)頃]

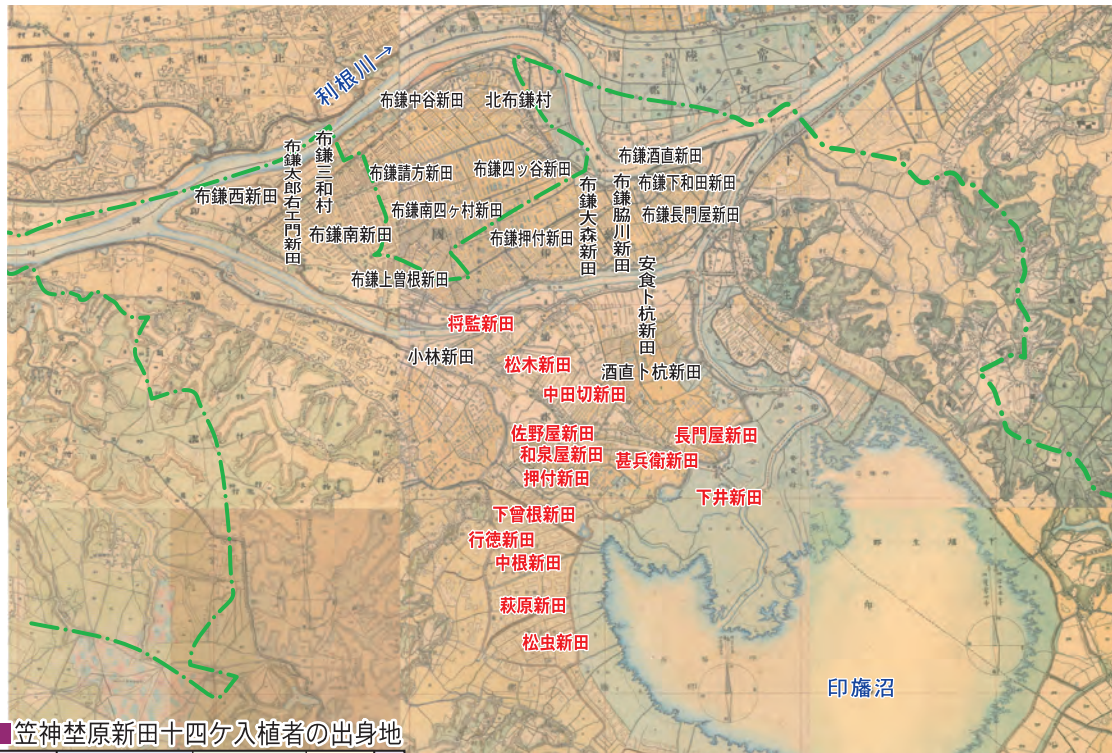


"笠神埜原新田"の成立

かつて北印旛沼の北部に形成された"逆三角州"の一角(旧本埜村の東半分)に相当、通称「十四ヶ新田」、正式には「笠神埜原新田」と呼ばれる江戸前期の開拓地であり、また新利根川開削工事(1662年~1666年)で廃村を余儀なくされた農民の代替地となったところでもある。

新田名を見ると、"行徳新田"、"下曾根新田"、"押付新田"、"中田切新田"、"松木新田"、"下井新田"の替地にあたる村落。隣村の名をとった"中根新田"、"萩原新田"、"松虫新田"は、それぞれの村が開発を請負った村落。"将監新田"、"甚兵衛新田"は、武士などの特定な人物が開発を請負った村落。そして"長門屋新田"、"和泉屋新田"、"佐野屋新田"は、屋号を冠していることから町民が開発を請負った村落であると、それぞれ考えられている。

■ 印旛沼北側の笠神埜原新田十四ヶの位置図



■ 笠神埜原新田十四ヶ入植者の出身地

新田の名称	新利根川筋の村名を使用				開発請負者などの名を使用				印西領の地名を使用				合計	
	下曾根	松本	下井	中田切	行徳	押付	和泉屋	長門屋	将監	甚兵衛	中松	萩原		萩原
武蔵幸手領			1	3	3					1	7			15
上野館林領									10		5	5	9	29
武蔵羽生領			1	1	1				1	1	2		3	10
常陸下妻領				1	2				1					4
下総庄内領			1	4	3				1					9
下総布川領	7	8	1	3	3	7				19				48
下総印西領	1	1	1	1	2				4		5			14
その他	2		2	2	1				9	2	1	1		20
合計	9	9	7	13	14	10	0	0	22	26	9	13	5	149

(資料:「国手形寺請状改書綴」寛文11年)

新利根川の開削

寛文2年(1662)に印旛沼・手賀沼の水害防止と大規模な新田開発を目的に、利根川の流路を布佐(現我孫子市)と布川(現茨城県利根町)の間で締め切り、直接、霞ヶ浦にもっていく新利根川の開削工事が行われ、寛文6年(1666)に完成した。しかし、水深が浅く、渇水時には舟運が困難であったことや、河道が直線的で遊水機能に乏しく、大雨による洪水が笠神埜原新田に水害をもたらしたことから、同9年(1669)に新利根川は廃川となり、利根川の流路は元の河道に戻された。

(この図は、財団法人日本地図センター発行の「手書彩色関東実測図」を使用したものである。)

"吉植開墾(吉植農場)"への入植

かつて本埜村(現印西市)の東半分を占めていた"逆三角州"のうち、沼に最も近い低湿地の下井34番地は、大正から昭和初期にかけて、入植者を募って開墾した土地である。ここは、吉植庄亮の土地であったことから「吉植開墾(吉植農場)」と呼ばれた。

吉植庄亮は、東京で歌人としての地位を確立していたが、大型機械や大規模集約経営の導入による合理化された近代的農村を目指して、大正14年(1925)、突如、故郷の本埜村(現印西市)下井に戻った。庄亮は、父の庄一郎から受け継いだ13ha余の耕作地と原野に加え、大正15年(1926)~昭和5年(1930)の5年間に約42haの荒地を開墾、そして新たな耕作地を農民に開放するため、凶作に苦しむ東北・北陸地方から移民を募り、昭和10年(1935)に山形県から10戸、富山県から10戸、地元千葉県から5戸、計25戸、50人の家族を入植させた。米の収量は、当時、1反(約992m²)当り4~5俵(1俵60kg)で苦しくもあったが、その年の秋には、さらに10数戸を入植させた。

しかし、昭和13年(1938)7月と同16年(1941)7月の二度にわたって起こった内水(印旛沼の洪水)による農場の大水害、そして昭和16年(1941)12月に勃発した太平洋戦争による農業資材や人手の不足は、入植者の生活を困難にした。そして昭和20年(1945)8月の終戦、同年12月に占領軍の政策による農地解放令、翌21年(1946)10月の第二次農地改革によって入植者は自作農になった。

■ 昭和22年(1947)頃の吉植農場の全景



印旛沼の治水と開拓に情熱を注いだ吉植家

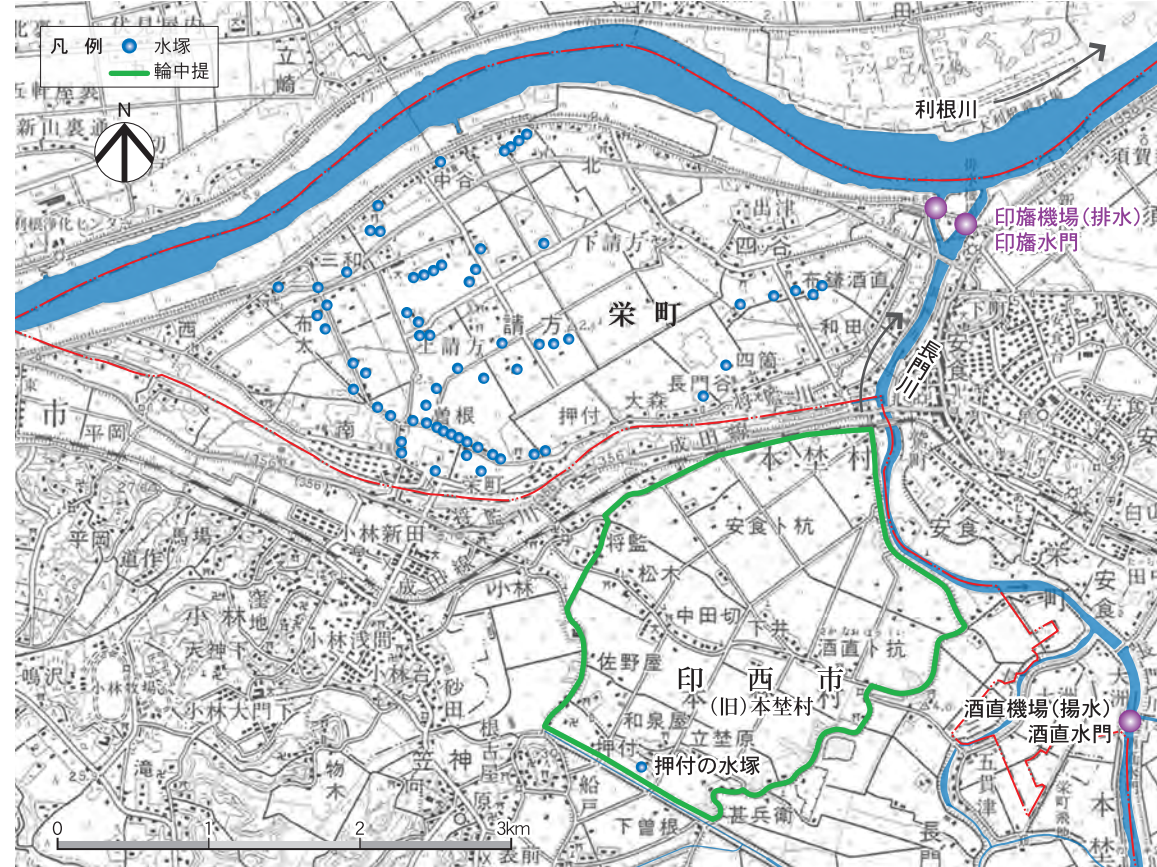
吉植家は、江戸時代から下井新田で名主を務めていた。吉植庄左衛門は老中田沼意次による疎水路開削工事、その息子の庄左衛門(同名)は老中水野忠邦の開削工事にそれぞれ従事し、印旛沼の治水に携わっていた。次世代の庄之輔は、下井新田外16か村長、埜原村長、千葉県議会議員などを務める傍ら、先祖代々の悲願であった印旛沼疎水路開削と開拓に情熱を注いだ。

また、その息子である庄一郎、つまり庄亮の父も利根治水協会を設立し、衆議院の代議士となって活躍するとともに、庄亮の吉植農場開設を決意させる機となった大正11年(1922)竣工の印旛沼水門の建設事業に大きな役割を果たした。

水害への備え

印旛沼周辺の耕地は土地が低い^{わじゅうてい}ため、沼の増水の影響を受けやすく、水害に悩まされていた。印旛沼の北側を貫流する利根川沿いの集落には、浸水に備えた水塚(ミズカまたはミツカ)を持つ農家が多く分布している。水塚は、屋敷より一段高くしたところに土蔵を建て、浸水から生活用品を守るようにつくられている。本埜村(現印西市)押付の"押付の水塚(県指定有形民俗文化財)"は、その典型である。また、集落や耕地を堤防(輪中堤)で囲み、水害に備えた。

■水塚の分布図



(水塚資料:「千葉県歴史別編 地誌I(総論)」千葉県 平成8年)

■本埜村(現印西市)押付の“押付の水塚”



(提供: (旧)本埜村教育委員会)

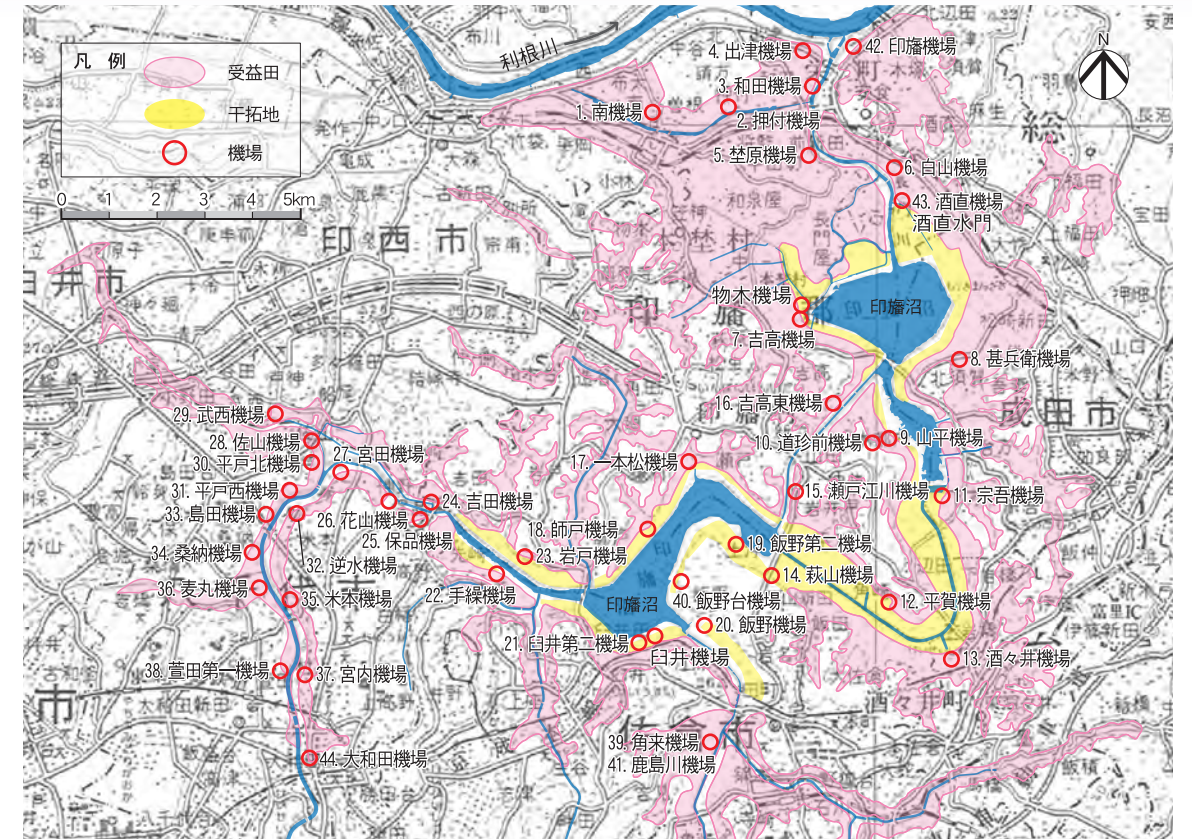
(敷地内は、私有地のため所有者の許可なく立ち入ることはできません。見学を希望する場合は、事前に(旧)本埜村教育委員会までご連絡下さい。)

■輪中堤



農業用揚排水機場と受益地

■受益田と干拓地



■用排水機

施設番号	機場名	かんがい面積(ha)	用水量 m ³ /sec	設備容量 m ³ /sec
1	南	70.0	0.216	0.2667
2	押付	60.0	0.186	0.2216
3	和田	90.0	0.278	0.505
4	出津	18.5	0.057	0.083
5	埜原	513.1	1.585	1.585
6	白山	778.6	2.377	1.565 0.827
7	吉高	558.5	1.764	1.80
8	甚兵衛	546.9	1.670	1.10 0.56
9	山平	50.0	0.155	0.2667
10	道珍前	35.0	0.108	0.217
11	宗吾	283.8	0.820	0.817
12	平賀	386.5	1.109	1.10
13	酒々井	493.8	1.562	1.523
14	萩山	36.3	0.112	0.112
15	瀬戸江川	18.4	0.057	0.057
16	吉高東	24.4	0.071	0.167
17	一本松	884.0	2.732	1.50
18	師戸	58.3	0.159	0.222
19	飯野第二	57.3	0.171	0.171
20	飯野	157.2	0.465	0.351
21	臼井	225.0	0.692	0.730

■排水専用機

施設番号	機場名	流域面積(ha)	設備容量 m ³ /sec
5	埜原	465.0	1.115
7	吉高	1,658.0	9.30 0.98
8	甚兵衛	249.0	2.25 0.56
11	宗吾	2,950.0	11.9 1.60
18	師戸	510.0	2.4 0.267
21	臼井第二	451.0	0.233 4.0
22	手繰	599.0	1.70 0.302
23	岩戸	288.0	0.80
24	吉田	210.0	
40	飯野台	269.0	1.50 0.23
41	鹿島川排水機場	1,300	5.3
42	印旛機場	607.0	92.0
43	酒直機場	607.0	0.35 4.84
44	大和田機場	120	

(資料:「印旛沼土地改良区管内図」印旛沼土地改良区 昭和63年)

2 漁業

江戸時代に印旛沼で獲れた魚介類は、鯉、鯰、鰻、鮠、鮠、腹赤魚、サイ、マルタ、蟹、鱧、海老(ツノガラエビ、中エビ、ヌカエビ)、蜆、田貝(真珠あり)、ゲバチ(ゲンギョ、ギギウ)などであったとされる〔「口訳 利根川図志 巻3」赤松宗旦 崙書房 昭和53年〕。

昭和期では、「印旛沼開発事業」の完成を境に、漁獲対象魚および漁法の種類は、ともに減少した。特に、漁法については、約25の漁具が魚介類に応じて用いられていたが、最近では張り網(コイ、フナ、雑魚など)を主として、その他に船曳網(エビ、ワカサギ、雑魚など)、柴漬(エビ、ウナギ、雑魚など)などに限られている。

一方、現在、沼に生息する魚種の特徴として、オオクチバス、ブルーギル、アメリカナマズなどの外来種が多く生息するようになった。また、最近まで佃煮の材料として消費されていたテナガエビが激減して、スジエビが取って代わってきた。

■柴漬漁



(出典：「川魚図志」 芦原修二 崙書房 昭和59年)



(出典：「いんば沼《第29号》」 財団法人印旛沼環境基金 平成20年)

■張り網



(出典：「印旛沼白書」平成15・16年版 財団法人印旛沼環境基金 平成16年)

沼の貴重さを伝える江戸時代の漁業権と採取権

古くから印旛沼の漁業・採取権を持っていたのは、印旛郡の北須賀村、船形村、台方村、下方村(以上現成田市)、吉高村、山田村(以上現印西市)、埴生郡安食村(現栄町安食)の7か村であった。その他に、印旛郡内の柏木村、上岩橋村、中川村、酒々井村(以上現酒々井町)、大佐倉村、飯田村、岩名村、萩山新田、土浮村、飯野村、下根村、角来村、小竹村、先崎村、白井村、白井台町、白井田町(以上現佐倉市)、保品村、神野村、平戸村、佐山村(以上現八千代市)、瀬戸村、鎌苅村、師戸村、岩戸村、吉田村、平賀村、松崎村、船尾村(以上現印西市)の29か村は、先の7か村に金銭を支払って、それらの権利を譲りうけていた。

一方、新しく幕府領となった笠神埜原新田の十四ヶ村は、毎年、洪水によって沼の土砂が水田に入って荒地化した。村民は、この荒地を沼の藻草や海老を肥料にして復興させるため、年に永一貫文を上納し、新たに漁業・採取権を得ることを願い出た。これに対して、すでにその権利を持っていた村々は、税金を佐倉藩に上納して権利を得ていることをはじめ、沼の管理への協力、藻草・海老の減少、生活難から沼での捕獲の必要性、などの理由をあげて、十四ヶ村の願いを取り下げてほしいと訴えた。

新旧の村々の対立は足掛け四年にも及び、評定所での吟味や役人の視察などを経て、ようやく寛文8年(1668)2月に至って、永二二貫八〇四文二分を上納することで、印旛沼の漁業・採取権が確立した。

さくぢあな 佐久知穴

『印旛村吉高地先の東北方向の七、八町(1町：約109.1メートル)ほど離れた印旛沼の沖合に、大・小5つの穴がある。その最も北にあるものを「佐久知穴」と称している。穴の大きさは、直径三間(1間：約1.82メートル)ばかり、深さは知ることができない。水がおびただしく湧き出て、水面から一、二尺(1尺：約30.3センチメートル)も吹き上げるため、その様子が遠くからもよく見える。

夏になれば、この穴の中へ、イナ〔鰻の小さいもの。体長が六、七寸(1寸：約3.03センチメートル)〕がたくさん集る絶好の漁場で投網で捕獲した。(出典：「口訳 利根川図志 巻4」赤松宗旦 崙書房 昭和53年)



(出典：「口訳 利根川図志 巻4」赤松宗旦 崙書房 昭和53年)

印旛沼で確認されている魚類

区分	純淡水産の魚			川と海を回遊する魚
印旛沼在来種	コイ	アカヒレタピラ	クルマサヨリ	ウナギ
	ギンブナ	ヤリタナゴ	ヨシノボリ	アユ
	キンブナ	ニゴイ	ヌマチチブ	ワカサギ
	モツゴ	ウグイ	ジュズカケハゼ	サケ
	ナマズ	オイカワ	ウキゴリ	マルタ
	ドジョウ	シラウオ	アシシロハゼ	ボラ
移入種	国内産	ゲンゴロウブナ タモロコ スゴモロコ	ハス ワタカ	ビワヒガイ ツチフキ
	外国産	オオクチバス ブルーギル カムルチー	タイリクバラタナゴ チャネルキャットフィッシュ	

(出典：「いんば沼《第29号》」 財団法人印旛沼環境基金 平成20年)

流域に育まれた文化

1 文化を培ってきた神社群

印旛沼周辺の神社を見ると、麻賀多神社、宗像神社、鳥見神社、埴生神社が多く、しかもこれらの四社は、それぞれに交わることなく分布している。これは、各神社に縁がある人々が住み分けていたことによるもので、その分布から沼の周辺に定着した人々の起源や、沼周辺の地域構成や文化形成の重要な手がかりを掴むことができる。また、これらの神社には、今に伝わる文化財、たとえば印西市平岡の"鳥見神社の獅子舞(県指定無形民俗文化財)"、白井市富塚の鳥見神社の"富塚の神楽(県指定無形民俗文化財)"、本埴村(現印西市)中根の"鳥見神社の神楽(県指定無形民俗文化財)"などが残されているとともに、成田市台方の"麻賀多神社の森(県指定天然記念物)"は、北総地域の代表的な社叢林となっている。

一方、水害の被害が大きかった本埴村(現印西市)の旧埴原村の「笠神埴原新田」では、江戸時代から堤防の構築や修理、水塚の補強を行い、水防組合を結成して水害に備えるとともに、水難除・防水の神としての水神信仰が盛んであった。押付、小林、松木、酒直ト杭、甚平衛、下井の各新田には水神社があり、旧埴原村全体で水神祭(水神講)が開かれており、水難除・防水の願いが生活の中に大きな位置を占めていたことがうかがえる。

神社の由来

麻賀多神社は、旧佐倉藩の総鎮守で古くから「まかたさま」と親しまれ、印旛沼の東岸から南岸にかけて存在する。佐倉市に11社、酒々井町に2社、成田市に2社、富里市に2社、八千代市に1社の計18社が「麻賀多十八社」と呼ばれている。その他に分社された神社が数社在る。



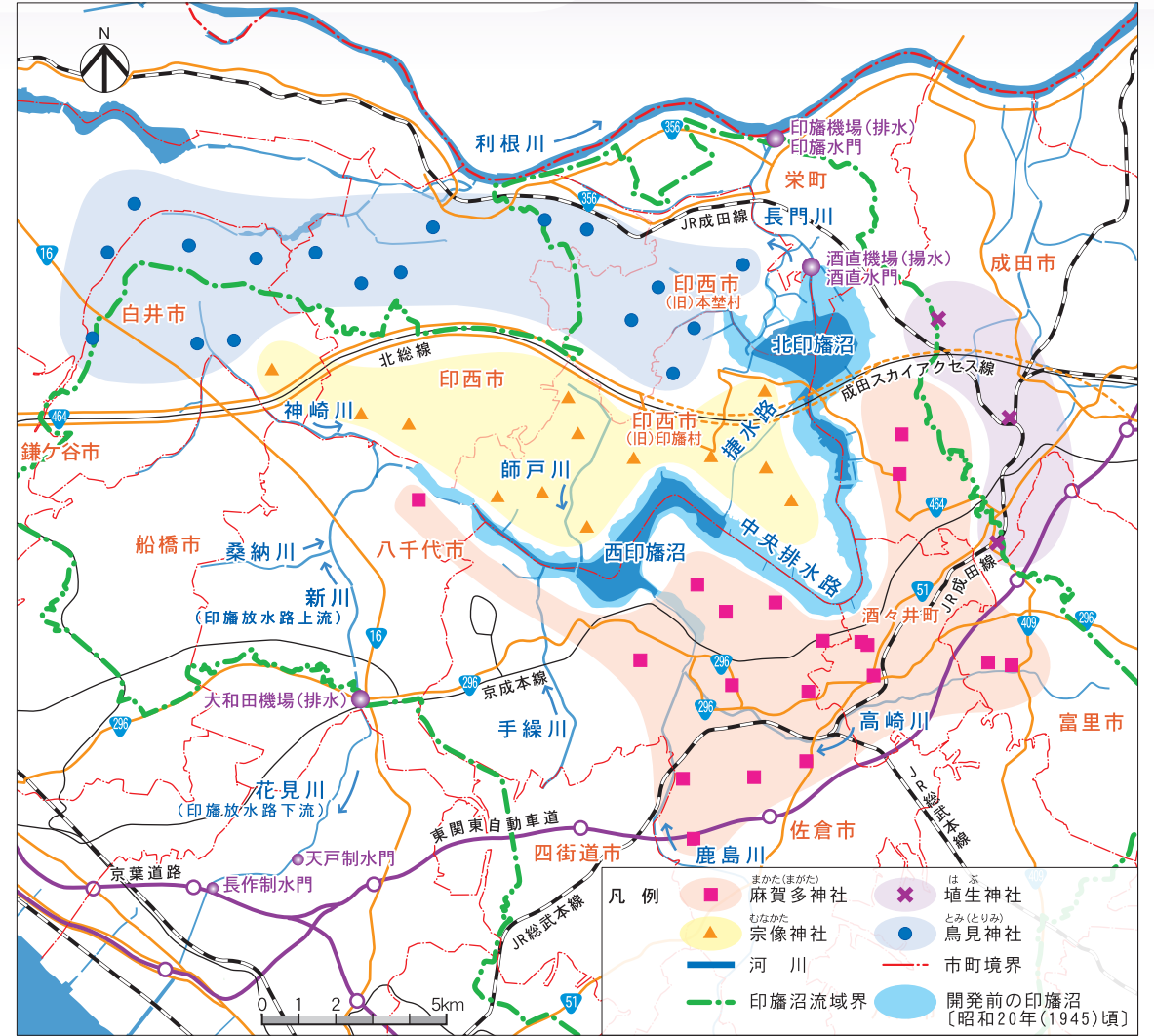
宗像神社は、福岡県宗像郡玄海町田島の宗像神社が本社といわれており、祭神は「宗像三女神」であり、海の守護神として信仰されていたことから、印旛沼周辺の宗像神社も「印旛沼の水運・治水の神」として祭られ、印旛沼の北岸にかけて存在する。印旛村(現印西市)に10社、印西市に2社、白井市に1社の計13社が「宗像十三社」と呼ばれている。



鳥見神社は、大和の国(奈良県桜井市の鳥見山)の等弥神社が本社といわれ、祭神は「物部氏の祖とされる神々」で、**匝埴郡**に進出した物部氏の子孫または一族が印旛郡にも定着し、祖神に祀ったのではないかとされている。印旛沼の北岸、宗像神社の更に北岸に存在する。印旛村(現印西市)に1社、印西市に6社、白井市に5社、本埴村(現印西市)に3社、柏市(旧沼南町)に3社の計18社が「鳥見十八社」と呼ばれている。



■ 四つの神社の分布と領域図



埴生神社の祭神は、「埴山姫命」で土をつかさどる神である。古代に土器や埴輪を作っていた土師部(はじべ)一族が居住し、埴山姫命を祀ったのが埴生神社ではないかといわれる。印旛沼の東岸に存在し、栄町に1社、成田市に2社の計3社がある。



水神社・水神宮のほとんどが祭神不詳であるが「水波比売命」別名「象女命」とされているところが多くみられる。利根川の河川改修や、印旛沼の干拓により他の神社へ移転し、合祀されているものも少なくない。



2 文化財

印旛沼周辺は、"古鬼怒湾(後の香取海)"の入り江であったことから、古くから人々が生活しており、その長い暮らしの歴史の中で地域の祭祀や信仰のための社寺仏閣が創建され、地域の文化の香りを増していった。この文化の一端として、印旛沼に因む伝説や遺跡があることは、より一層の彩りを添えている。

印旛沼の形が龍の姿に似ていることから、古くから豊かな水の恵みを与えてくれる神様として龍の存在を信じ、大切に祀っていたようである。栄町龍角寺の"銅造薬師如来坐像(国指定重要文化財)"・"龍角寺境内ノ塔趾"・"龍角寺出土遺物"を擁する龍角寺(7世紀後半建立)には、龍神伝説が残り、また、白井市清戸の"清戸の泉(県指定史跡)"にも、龍神伝説と清戸地区の地名の由来が記された版木があり、龍神信仰にまつわる遺跡の代表例とされている。

一方、印旛村松虫の"木造薬師如来坐像1・薬師如来立像6(七仏薬師)"・"鑄銅孔雀文磬"(磬とは、誦経など修法時に打ち鳴らす器具)を擁する松虫寺[天平15年(743)建立]では、松虫姫の伝説がある。

■龍角寺の"銅造薬師如来坐像"〔付図G-3〕



(提供：千葉県教育委員会)

■龍角寺境内ノ塔趾〔付図G-3〕



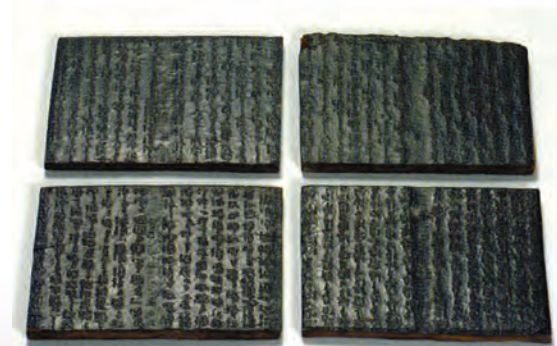
(提供：千葉県教育委員会)

■清戸の泉〔付図C-4〕



(船橋カントリー倶楽部内)

■清戸の泉-版木〔付図C-4〕



(薬王寺内)

(提供：千葉県教育委員会)

3 伝説

龍神伝説

『天平3年(731)に大干ばつとなり、人々が雨乞いをしたところ、龍が現れて雨を降らせ、7日後再び龍が現れ頭、胴、尾の三つに分かれて落ちてきたといひます。頭が落ちてきたところが龍角寺。胴は、ここから西へ8kmのところ落ち、そこには龍腹寺(本埜村(現印西市))が建てられ、尾は、どういふわけか、はるか東南の匝瑳市(旧八日市場市)に落ち、龍尾寺が建てられたといひ。』

■龍角寺・龍腹寺・龍尾寺・松虫寺の位置



松虫姫伝説

『奈良の都で重い病気にかかった聖武天皇の三女松虫姫の夢枕に、下総萩原の出戸の薬師如来を訪ねて祈願すれば必ず治るだろう、というお告げがありました。祈願の甲斐あって病は治り、松虫姫は都に帰られました。天皇は大変喜び、それまでは小さな祠にあった薬師如来のために、都から大工を遣わし寺を建てました。そして松虫姫の名前にちなんで、寺を松虫寺、寺のある辺りを松虫村と呼ぶようになりました。』

■松虫寺の山門〔付図F-4〕



■松虫寺"木造薬師如来坐像1・薬師如来立像6(七仏薬師)"〔付図F-4〕



(提供：印西市教育委員会)

印旛沼流域歴史年表

西 暦	年 号	主 な 出 来 事
約1万～ 2千年前	縄文時代	現在の霞ヶ浦や手賀沼などとともに、利根川下流域一体の低地は、古鬼怒湾という内湾であった。当時の貝塚の分布によって、古鬼怒湾の位置を知ることができる。その後、海退と上流からの土砂の流入によって海水は淡水化し、陸地化をたどった。
700年代	奈良時代	万葉集に“香取の海”と詠まれているのは、印旛沼を含むこの一帯の水域であり、印旛沼はその入り江で、まだ完全には独立していなかった。
709	和銅 2年	下総龍角寺(栄町)が創建されたと伝えられる。
800～ 1180年頃	平安時代	平安時代末期に暗躍した金売り吉次の墓が利根川と印旛沼の間にあったと伝えられていることから、印旛沼はこの頃にはすでに陸地化し、香取の海から独立した一つの湖沼であったと推察。
1500年代	戦国時代	師戸城(印旛村(現印西市))の城下集落が城東下の字根古屋の低地に造成される。江戸時代になって、洪水被害が度重なり、台地上の師戸に移転。印旛沼の洪水は、この頃から頻発するようになったと推察。
1594	文禄 3年	伊奈備前守監督のもとで、忍城主松平忠吉の臣、小笠原三郎右衛門によって江戸湾に注いでいた利根川の河道を東に向かわせる、いわゆる利根川東遷工事が開始。
1621	元和 7年	利根川本流を鬼怒川支流の常陸川(広川ともいう)と結ぶ土木工事(新川通および赤堀川の開削)が開始。
1654	承応 3年	鬼怒川につなぐ赤堀川の掘削工事が完成し、利根川河道は銚子に向かい、「利根川東遷事業」が竣工。
1662	寛文 2年	印旛沼・手賀沼干拓のため、新利根川開削、同6年竣工。同9年廃止。印旛沼辺の埜原(やわら)新田14カ村(本埜村(現印西市))を開拓。
1663	寛文 3年	利根川下流域、印旛沼、手賀沼などの新田開発を目的に、布川と布佐間で利根川を締め切り、新利根川を掘削して、利根川の水を霞ヶ浦に流す工事が開始し、笠神埜原新田(本埜村(現印西市))を開発。
1667	寛文 7年	1666年7月に利根川下流域一帯に大洪水が発生。この原因が新利根川にあるとして、新利根川を廃川として元に復す。
1676	延宝 4年	印旛沼を利根川の遊水池にするため、将監川を開削。
1695	元禄 8年	鉄牛和尚が元禄幕府老中に印旛沼干拓を献策、これを受けて佐倉藩主稲葉正住が鹿島川河口部の改造工事を行ったが、転封によって中止。
1719	享保 4年	8代將軍吉宗は、幕府の軍馬を飼育する牧場経営に着手し、小金牧(高田台、上野、中野、下野、印西の5牧)、佐倉牧(小間子、柳沢、高野、内野、取香、矢作、油田の7牧)があった。
1722	享保 7年	享保の改革で、柳沢、高野、内野の3牧が幕府から佐倉藩に管理が移った。
1724	享保 9年	平戸村(現八千代市)の名主・染谷源右衛門が中心になって、印旛沼の水を江戸湾に落とし、新田開発を行う許可を幕府から得て印旛沼掘削工事を始めたが、人手、資金難のため挫折。
1780	安永 9年	下総国印旛郡惣深新田(印西市)名主平左衛門・千葉郡島田村(八千代市)名主治郎兵衛、幕府に印旛沼開発を願い出る。
1782	天明 2年	印旛沼の新田開発と水害防止のため、惣深新田の名主平左衛門、島田村の名主治郎兵衛が請負人になり、幕府の主導のもとに享保の印旛沼掘削工事を再開。
1786	天明 6年	江戸開府以来の最大規模の大洪水が発生。印旛沼掘削工事の諸施設は破壊、加えて最高責任者老中田沼意次が罷免され、掘削工事は中止。
1843	天保14年	「利根川分水路印旛沼古掘筋御普請」として、幕府は印旛沼掘削工事を再開。その目的は新田開発はなく水害防止と船運であり、沼津藩、庄内藩、鳥取藩、貝淵藩、秋月藩のお手伝い普請として強行した。難工事に加えて、総責任者老中水野忠邦が失脚して、工事は5ヶ月後に中止。

西 暦	年 号	主 な 出 来 事
1858	安政 5年	「利根川図志」刊行し、幕府に献上。
1871	明治 4年	8月廃藩置県で館山県ほか24県となる。11月県の統廃合が行われ、房総は木更津(安房・上総)、印旛(下総)、新治(下総)の3県となる。
1873	明治 6年	6月15日木更津、印旛の両県を統合して千葉県を置き、県庁を千葉町に移し、柴原和が初代千葉県県令に任命(6月30日県令となる)。7月県内を16大区90小区に分ける(大区小区制)。
1875	明治8年	5月7日新治(下総)の利根川以南が千葉県に編入。
1878	明治11年	11月郡区町村編制法に基づき、全県を21郡に編成(南相馬、東葛飾、印旛、下植生、千葉、香取、海上、匝瑳、山辺、武射、長柄、上植生、夷隅、市原、天羽、周准、望陀、平、安房、朝夷、長狭)。
1888	明治21年	4月町村制施行。町村合併が行われ、県内2457町村が358町村になる。
1896	明治29年	6～9月に出水。印旛沼の水位は平常より3.3m高くなる。3月郡の統廃合が行われ、12郡となる(東葛飾、印旛、千葉、香取、海上、匝瑳、山武、長生、夷隅、市原、君津、安房)。
1897	明治30年	1月佐倉一成田間の鉄道が開通。4月郡制施行。6月総武鉄道佐倉一銚子間が開通。10月府県制施行。
1900	明治33年	利根川治水対策として浚渫工事が始まり、低水工事から高水工事へと大きく転換。
1911	明治44年	5月県営軽便鉄道野田線(野田一柏間)、10月多古線(成田一多古間)開通。
1919	大正 8年	半官半民の中央開墾株式会社を設立、印旛沼北部1,000haの開墾・埋立工事に着手、大正10年に100haを完成して中止。
1921	大正10年	農商務省、工期10年の印旛沼手賀沼土地利用計画を樹立したが着工せず。1月千葉市、市制施行。
1922	大正11年	利根川と印旛沼を結ぶ長門川の入り口に印旛水門が完成し、利根川からの逆流を防ぐ。外水は防げるようになったが、内水による洪水は残る。将監川を締め切る。
1927	昭和 2年	農林省、印旛沼手賀沼大規模開墾計画を樹立したが着工せず。4月県営多古線、八街線を成田鉄道に払い下げる。
1935	昭和10年	"吉植農場"の入植が始まり、水田耕作を始める。7月国電が千葉まで乗り入れる。
1945	昭和20年	八千代市保品と印旛村吉田の間に、印旛沼に架けられた最初の木橋が完成。(この地に駐屯していた旧日本軍捷・範部隊が解散直後に、地元へのお礼として建設したという。一時、地元では捷範橋と呼ばれる。)
1946	昭和21年	終戦後の食糧難と引揚者の失業対策として、印旛沼・手賀沼の開拓を国営事業として行う。国営印旛沼手賀沼干拓事業として農林省直轄事業に決定。鹿島、平戸干拓工事に着手。"吉植農場"は、水害、第2次世界大戦などで苦労を重ねながら解散。
1947	昭和22年	この頃、印旛沼から"モク採り"が姿を消す。
1950	昭和25年	「印旛沼手賀沼干拓事業」の第1次事業計画を作成。11月川崎製鉄、千葉市埋立地に工場建設を決定(1953年操業開始)。
1953	昭和28年	「印旛沼手賀沼干拓事業」早期完成のため、計画を全面的に改訂。9月町村合併促進法制定(1955年111市町村となる)。
1954	昭和29年	土地改良法の改正に伴い、手賀沼を分離した印旛沼干拓基本方針が決定。
1956	昭和31年	「印旛沼干拓土地改良事業計画」を決定。鹿島干拓工事完成。
1957	昭和32年	印旛沼排水機場工事着工。印旛沼干拓に伴う漁業補償の協定書に調印。
1958	昭和33年	佐倉市萩山と印旛村(現印西市)山田の間に印旛大橋が架かる。
1960	昭和35年	印旛機場(排水)完成。これを機に内水の排除が可能になり、印旛沼の洪水はなくなる。
1962	昭和37年	計画基準雨量の変更、大和田に排水機場を設け排水能力の向上、工業用水の参加などの事由により再度同事業計画を改訂。

西 暦	年 号	主 な 出 来 事
1963	昭和38年	農水省直轄事業から水資源開発公団に継承され、印旛沼開発事業と改名。大和田機場(排水)着工。舟戸大橋竣工。川鉄工業用水取水を開始。
1964	昭和39年	西部調節池の堤防盛土工事着工。国道14号線橋梁竣工。
1965	昭和40年	捷水路掘削工事、酒直水門及び酒直機場工事、北部調節池の堤防盛土工事を着工。
1966	昭和41年	大和田機場完成。酒直水門及び酒直機場が完成。
1967	昭和42年	捷水路掘削工事竣工。中央干拓干陸開始。鹿島橋脇の県営工業用水取水施設取水開始。印旛沼流域下水道事業着手。
1968	昭和43年	北部調節池堤防竣工。西部調節池堤防竣工。疎水路(新川、花見川)掘削工事竣工。水公団印旛沼管理事務所開設。県営上水道取水を開始。中央干拓地完成。
1969	昭和44年	北部・西部調節池堤防盛土完成。水資源開発公団印旛沼開発事業が竣工。
1980	昭和55年	建設省「利根川・印旛沼総合開発事業」予備調査開始。
1985	昭和60年	大和田機場(排水)を利用して、印旛沼の水の流動化を試験的に開始。湖沼水質保全特別措置法に基づき指定湖沼の指定を受ける。
1986	昭和61年	台風10号とその後の低気圧の豪雨で、鹿島川・印旛沼の水位がそれぞれY. P4. 46m、3. 83mまで上昇。オニビシが印旛沼水面の474万㎡を覆うほど、異常発生し、大規模な刈り取り作業を千葉県が開始。
1987	昭和62年	第1期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:昭和61年～平成2年)を策定。
1990	平成 2年	印旛沼の鹿島川河口付近でブラジル原産のヒユ科、ナガエツルノゲイトウを初めて発見。
1992	平成 4年	第2期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:平成3年～平成7年)を策定。
1993	平成 5年	北沼のオニビシは"ヒシの刈り取り"事業によって殆ど消滅、西沼も、一部に残る程度に激減。
1994	平成 6年	オニビシの刈り取り作業を中止。印旛沼憲章が制定。
1997	平成 9年	第3期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:平成8年～平成12年)を策定。
2000	平成12年	建設省「利根川・印旛沼総合開発事業」中止。。
2001	平成13年	千葉県は印旛沼流域水循環健全化会議を発足させ、印旛沼の抜本的な改善策の指針作成に乗り出す。「印旛沼流域水循環健全化緊急計画」を策定。水資源開発公団千葉用水総合管理所が千葉用水総合事務所に改名。
2002	平成14年	第4期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:平成13年～平成17年)を策定。
2007	平成19年	第5期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:平成18年～平成22年)を策定。
2009	平成21年	「印旛沼・流域再生 恵の沼をふたたびー印旛沼流域水循環健全化計画ー」を策定。印旛沼流域水循環健全化会議「印旛沼・流域再生 恵の沼をふたたび 印旛沼流域水循環健全化計画」第1期(2009～2015年)行動計画(案)を策定。
2012	平成24年	第6期「印旛沼に係る湖沼水質保全計画」(計画期間:平成23年～平成27年)を策定。「第1回印旛沼・流域再生大賞」が決定。印旛沼流域水循環健全化会議「印旛沼流域における雨水浸透施設及び雨水貯留施設の設置を推進するためのルール」(通称:印旛沼ルール)を策定。

(資料:「千葉県のあゆみ」千葉県 昭和58年、「印旛沼ものがたりーあの日あるときー」独立行政法人水資源機構千葉用水総合事業所(現:千葉用水総合管理所)平成14年、「印旛沼のはなし」財団法人印旛沼環境基金 平成18年、「いんば沼白書 平成23・24年版」財団法人印旛沼環境基金、いんばぬま情報広場ホームページ 印旛沼流域水循環健全化会議)

【主要参考文献】

- ・印西町町史編さん室(平成5年):印西名所図会
- ・印旛村(昭和59年):印旛村史 通史
- ・白井田自治会(平成16年):白井田の今昔
- ・財団法人印旛沼環境基金(平成11年):印旛沼ー自然と文化ー第6号
- ・財団法人印旛沼環境基金(平成18年):平成17・18年版 印旛沼白書
- ・財団法人印旛沼環境基金(平成24年):平成23・24年版 いんば沼白書
- ・財団法人印旛沼環境基金(平成18年):印旛沼のはなし
- ・栄町(平成11年):栄町史
- ・佐倉市(昭和46年):佐倉市史
- ・酒々井町(昭和62年):酒々井町史 通史
- ・白鳥孝治(平成18年):生きている印旛沼ー民俗と自然ー
- ・水資源開発公団千葉用水総合事務所(平成14年):印旛沼ものがたりーあの日あるとき
- ・千葉県(平成8年):千葉県の歴史 別編 地誌1(総論)県史36
- ・千葉県(平成11年):千葉県の歴史 別編 民俗1(総論)県史34
- ・千葉県教育庁教育振興部文化財課(平成17年):ふさの国の文化財総覧
- ・千葉県神社庁(昭和62年):千葉県神社名鑑
- ・本埜村(昭和58年):本埜村史
- ・本埜村教育委員会(平成20年):本埜の歴史ー印旛沼に育まれたある農村の物語ー

編集協力(50音順 敬称略)

石井幸一 (千葉県佐倉市在住)	千葉県立房総のむら
印西市	麻賀多神社
財団法人印旛沼環境基金	松虫寺
印旛沼土地改良区	独立行政法人水資源機構 千葉用水総合事業所
国土交通省国土地理院	宗像神社
栄町	葉王寺 (清戸の泉)
佐倉市	山崎啓爾 (千葉県長生郡長柄町在住)
千葉県立佐倉西高等学校	龍角寺
酒々井町	
白井市	
千葉県教育委員会	
千葉県神社庁	
財団法人千葉県文化財センター	
鳥見神社	
学術団体日本河川開発調査会	
殖生神社	
株式会社船橋カントリー倶楽部 (清戸の泉)	

印旛沼流域情報マップー歴史・文化編ー

平成 20年 3月発行

平成 25年 3月改訂

監修 虫明 功臣 (印旛沼流域水循環健全化会議委員長)
白鳥 孝治 (印旛沼専門家)
本橋 敬之助 (財団法人印旛沼環境基金主任研究員)

企画・編修 千葉県

発行 印旛土木事務所

〒285-0026 佐倉市鎬木仲田町8-1
TEL 043 (483) 1140

制作 株式会社 アイ・ティー・オー

本書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の50万分の1 地方図、20万分の1 地勢図、5万分の1 地形図、その他及び空中写真を複製したものである。(承認番号 平24関複、第166号)